
探索型学園物語

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探索型学園物語

【Nコード】

N2615R

【作者名】

蒼

【あらすじ】

歪な存在。それは弱いのが怖くて、我武者羅に強さを欲した。だが、その強さを振るうことが怖かった。人と触れ合うのに臆病で、いつからか勘違いされるようにもなった。そんな時に出逢う新たな存在。居合だけを極めた武士娘、詠唱破棄が出来なく広範囲殲滅呪文しか詠唱出来ないドジっ娘、支援専門である筈の前線に出る怪力乱神な天然治癒師。歪な存在達に出逢い、そして絡み合う心情。変わるモノは何か、変わり続けたい想いは何か。優しく甘い、それでいてちょっぴりほろ苦い勘違いが織り混ざった物語が紡がれます

1. 『マーセナリー』（前書き）

この物語に関する国名、人名等は現実世界のモノとは関係ありません。云わばフィクションです。

それらに関する苦情等は一切受け付けませんのであしからず。

特に問題ないようでしたらスクロールしてください。

上記の文を認められない方はプラウザバックを推奨します。

1. 『マーセナリー』

人が住まい魔物が跋扈し王が統治する世界『アルカディア』。

一つの大陸を四人の王が分け隔てるその世界は表向きだけを見れば平和そのものだ。

北の王『シグムント』。

南の王『ヴァーミリオン』。

東の王『シュヴァルツ』。

西に王『ミリアリア』。

それぞれの王の名が幾星霜もの時を越えてなお受け継がれてきた国の名前。

旧暦時代にこの世を脅かした『魔王』と呼ばれる存在。その存在を討伐する為に世界が一致団結し立ち上がり、その前線を支え、そして遂に『魔王』に勝利した四人。それこそが現在の世界を四つに分断する国の最初の王となった者達。

その榮譽を永遠に忘れないために国の名とされた勇者達。

勿論、中心となる国はその四つだが他にも小規模、中規模の国は存在し、またそれらは世界を支えている。

例えば極東の島国『ジパング』。深い山々の間に集落のように存在する国『シノビ』など。それらの国や人がいるからこそこの世界の平穏は守られているのだ。

だが、最近になり実しやかに囁かれている噂があった。

魔物の王たる存在『魔王』はいなくなった筈だというのに、未だこの世界には魔物という怪物は所狭しと生息している。それに旧暦時代の遺跡など、新暦の時代に突入したというのに、未だ人の手が

付けられていない場所など大量に残されている。そのような場所は現代の人間にとっては宝の山同然。

だからこそ、世界は一つの協約を作り上げた。

”『魔王』は未だにこの世界に君臨している。倒されたのは見せ掛けであり、実際には常世から隠れ、影の王国でその身に受けた傷を癒している。その証拠こそが未だに跋扈する魔物だ”

この噂が真実か虚偽なのかは誰にもわからない。だが、わからないでは済まされない問題であることも事実。

ならばこそと、四人の王は協約を結ぶ。

来るべき『魔王』との戦いの為の人材を育てるとともに、世界に残る遺跡等の旧暦時代の”遺されし異物”アーティファクトなどを回収したり、”失われし技術”ロステクノロジーの復元、”消え去りし知識”エッセントスベルの再生などを主な仕事する専門者の育成。

それこそが新暦の今、世界の人間が最も憧れる職業『冒険者』なのだ。

冒険者の仕事の主な部分は先ほども語った通りであり、他には冒険者育成学校『マーセナリー』での講師、商業ギルドの護衛など多岐に渡る。

冒険者になる為に必要なことは特に無い。自身が住まう国の行政機関で登録するだけ。勿論、他の仕事との副業も可能であり、登録により発生するデメリットも存在しない。だが、本気で『冒険者』を目指す者達は16歳から入学することが出来る六年制学校である『マーセナリー』に通うのが一般だ。マーセナリーは単位制の育成学校であり、様々な職業の授業が行われる。課題なども本当の迷宮探索などで途中退学をする生徒も多数存在するが、やはりこの学校を卒業できた存在は他の冒険者に比べ頭一つ自力が違い、他者からの信用も得やすい。

だからこそ、殆どの若者はこれらの学校に入学する為に必死になつて勉強したり体を鍛えたりする。

このマーセナリーは世界各地に点在するが、やはり有名無名の違いがあつたりし、有名な処はそれだけ入学競争が激化し、無名な処は殆どそのような競争は発生しない。有名どころはやはり四つの大國がそれぞれの自国内で運営するマーセナリーだ。冒険者という職業が世界で一般化し、このマーセナリーが各国、各地方ごとに作りあげられてから早百数年。それだけの年月が過ぎればそれなりの実績も同じように積み上げられる。

中でも著名なのが北の国『シグムント』から輩出されたランスロツト^{アイティファクト}ニミユエが手にした”遺されし異物”聖剣アロンダイト、南の国『ヴァーミリオン』から輩出されたジェネウス^{アイティファクト}ガルグリオスが手にした”遺されし異物”魔剣ダーインスレイヴ、東の国『シユヴァルツ』から輩出されたヘルメス^{エンシエンテススル}トリスメギストスが再生した”消え去りし知識”契約魔法、西の国『ミリアリア』から輩出されたアイザック^{ロストテクノロジー}マグヌスが復元した”失われし技術”刻印魔法など、種々様々な偉業を成し遂げている。

故に若者はそれらのマーセナリーに入学しようと死にもの狂いになるのだ。それこそ、自身の命を懸けるほどに。だが、それほどの決意と信念をとして入学できたマーセナリーは学ぶ内容の水準は非常に高い。講師に就く教師も現役時代に活躍した冒険者や一時的に講師役に就いている現役冒険者と、それこそ学ぶべき知識は沢山だ。

その一角、北の国『シグムント』の中心に位置する『マーセナリー』こそがこれからの物語の中心。そこで彩られる物語を綴つていこう。

明けの明星が空に昇る頃、青年　ゼルブスト「レーベン」は眼を覚ます。

その行為は既に幼少の頃から確立され、今では自身が持つ体内時計が秒刻みで正確に脳へと命令を出し、規則正しいにしては些か過剰な日課の開始の合図でもあった。

刹那すらも時間を遅らせずにゼルブストは瞳を開け身体を起こす。そのまま寮部屋に設置されているベッドから抜け出し、寝巻き代わりになっているジャージを脱ぎ捨て、一種の美と表現しても過言ではない己の肉体をこれでもかと晒し出す。時期は夏季の少し手前だが明け方特有の肌寒さがゼルブストを襲う。だが、その外気すらにも何ら反応することなくゼルブストは着替えを済ました。

着替えの後は洗顔を済ませ、漸く準備は整ったとばかりにゼルブストは部屋の扉を開く。

部屋の外は未だ物音一つしない。まだまだこの寮に住む人間にとつては睡眠を貪る時間であって、ゼルブストのようにこんな早くからベッドから抜け出す酔狂な存在は数少ない。少ないだけでありいることにはいるのだが、そういう人間は他の人に迷惑にならないよう心掛けているし、勿論ゼルブストも同じ心境であるからこのように静かに、足音一つ立たせずに移動しているのだ。

そのままゼルブストは寮から外へと出ることに成功。そこまで行ければ後は音を立てても問題ない。ゼルブストは息を吸い、そのままその場所から”消える”。消えると言っても魔道士が夢見る”消え去りし知識”^{エンシェントスベル}の>テレポート/瞬間移動<ではない。単純に己の持つ身体能力だけで移動しただけ。ただそれだけで現実に於いて理不尽のような現象を成し遂げたのだ。

常人には　いや、それなりに名が通っている冒険者にすら視認はおろか知覚することすら敵わない速度でゼルブストは大地を駆け抜ける。目指す場所は毎朝の鍛錬場と定めている森の一角。寮、学校と共にあまり離れておらず、且つ人目に付き難い場所として、そ

れでいて森の中という一種の閉鎖空間、障害物等の鍛錬をするにはもってこいの場所だ。学校に入学してすぐにその場所を見つけ出せたのはまさに僥倖だったことだろう。

数分もすればその所定の場所に辿り着く。

先ほどはあまり離れていないと迷ったが、それはゼルブストが単に思っているだけであり常人からすれば十分に離れていると言えよう。距離にすれば凡そ数キロメートルは離れているその場所。そこまでをノンストップで駆け抜け、それでいて息一つ乱していないゼルブストは化物と称されても可笑しくない。現に学校では期待の新人として注目を浴びている。当の本人からしてみれば邪魔な御節介という所だが。

周りには誰もいないことはここ数ヶ月で認識済みだが、一応辺りの気配を探り誰もいないことを確認してから訓練に入る。準備運動の類は行わない、というよりもここに来るまでのランニングという名の疾走が準備運動の代わりだ。その御蔭でゼルブストの身体は程よい熱を持っており、いつでも訓練に移行できる。

トットトと軽くその場で飛び跳ね、ゼルブストの身体は霞み消える。それは場所に来た時のように、ゼルブストが持つ身体能力だけでその現象を叩きだす。樹から樹へ、枝から枝へ、森を構成する物質をゼルブストは駆け抜ける。枝に足を掛けて跳躍し、そのまま身体を捻じり回転、その勢いを以て右手に握る鈍色のナイフを振りかぶる。そのまま落下地点の通過点にある太い枝に一闪。するとその枝はまるで元からその場所に何もなかったかのようにするりとナイフの刃は通り抜け、そのまま両断された。

ゼルブストが持つナイフは刃渡り二十センチと大型だが、それでも素人が扱ってもそう易々と太い枝を切断に至ることなどない。それだけゼルブストが持つ身体能力と技術力が高い表れだ。

着地した途端すぐさま次の行動に移れる辺り、身体の使い方が上手い証でもある。一閃、二閃と神速の斬閃を煌かせながらゼルブス

トの鍛錬は続く。

己を磨き続け早十年。ゼルブストは自分を極東に位置する島国『ジパング』特有の武器、刀に例えて鍛え続けた。熱された鋼は打ち据えられればそれだけ強度やしなやかさ、鋭さや美しさを増していく。熱された想いがあるうとも、それに伴う鍛錬が無ければ意味が無く。それを理解していたからこそ、ゼルブストは幼い頃から自身を傷め続けた。それこそが今でも続く早朝の鍛錬であり、現状。

これ以外の鍛錬はしないのか？ もし周りに観衆がいたのならそのような疑問を浮かべることだろう。

そして、その答えは是、だ。何しろゼルブストが出来ることと言えばこれ位しかなく、後は>ブレイブフォース/身体強化くなどの自己強化魔法だけで他の技能は一切ないと言っても過言ではない。ゼルブストは幼い頃から天才だった。故に自身に出来ること出来ないことも幼少期の時点で理解しており、ただ只管に出来ることを磨き続けたのだ。そしてその結果が今の現状であり、その御蔭で”暗殺士学科”一年にして学科最強の名を恣にするほしくまおことに成功している。

空気が弾け、その場所にゼルブストが現れる。

汗が滴り落ちる　ことはなく、息が乱れることもない。一日はおろか、下手をすれば一週間、大型の遺跡等なら一ヶ月もの間、敵と戦い続け神経を尖らせ削らせるような環境を仕事場する冒険者を目指す者達が、たかが数時間の運動で息を乱しては生き抜くことは難しい。それが後衛の職業ならばまだ解らないがゼルブストは前衛。それも装甲が紙とも称される暗殺士アサシンだ。魔物の攻撃を一撃でも貰えばそれだけで致命傷に至る。それ故に敵の攻撃全てを回避することが必須の技能。それこそ一日中全力で身体を動かせるぐらいでないといけない。

これはゼルブストが勝手に考えていることであって他の冒険者からすれば気負い過ぎだと諷められるレベルだ。だが、それでもゼル

ブストは臆病にその甘い誘惑を振り払う。まるで何かに怯える幼子のように、ただただ自分を傷つけて鍛えて、その先にある見えない光を目指すように。

「……そろそろ時間だな」

ピクッとゼルブストは何かに反応する。

それは自己の体内時計が鳴らす鐘だ。その鐘の意味は朝食の時間、並びに学校の登校時間。いくらゼルブストの身体能力が化物クラスと言えど、ゼルブスト自身は生粋の人間種だ。活動を起す為にはそれだけエネルギーを消費せねばならず、その消費するエネルギーは補給せずには賄えない。

その為に行うべき行動は何か。そんな物、小さな子供ですら理解出来る。朝食を取る、ただこれだけ。

「……行くか」

この場所に来たときのように、鍛錬時のようにゼルブストの身体が霞む。

疾走する音すら立たずに無音、それでいて高速の域に達する速度で飛翔する。目指す場所は学校に設営されている食堂だ。安さが売りのその場所は、学校に通う金無き亡者達から絶大の人気を誇る。そんな場所に向かうゼルブスト自身は万年金欠状態ではなく、反対に小金持ちに近い。だが、他の食を取れる所はカフェやレストランなどの洒落た所しかなく、一人で入るには勇気がいるし、何よりそういう場所は苦手なのだ。知り合いもいるにはいるが、それらとそこに入るには違う意味で勇気が無く。だからこそ、ゼルブストは金欠でもないのにそのような激戦区に身を投げ出す。

毎朝若干気落ちしつつも、そこ以外では食事を取れる場所もない。仕方なく、本当に仕方なく、嫌々ゼルブストは向かうのだった。

ここ北の国『シグムント』で国営されている中央『マーセナリー』、通称『ヴォルスング』は『シグムント』で一番人気の『マーセナリー』だ。これに匹敵するのが他の三大国が国営するマーセナリーであり、その四つは敬意を込め名前が付けられている。これは正式に決められたものであって誰かが勝手に呼びだしたとかではない。他のマーセナリーには国、または機関等が付けた名前はなく、またマーセナリーに名前を付けてはいけなくと協約で取り決められている。それほど四か所のマーセナリーは特別だという証にも成っている。他のマーセナリーにも名前があることにはあるが、それは正式のものではなく勝手その周りの人間達が言っているだけなのだ。言ってみればそれほど冒険者を目指す存在達にとっては憧れる場所ということでもある。

そんな超難関な、それこそ狭き門を潜り抜けた場所に立ち、その中で頂点に君臨するゼルブストは本当に凄まじいという他ない。事実、ゼルブストは学校の学生達から敬意と憧憬と畏怖と嫉妬の視線を毎日これでもかと注がれる。中にはその憧憬が思慕の情に変わることもだつて珍しくない。六年制の学校に入学してから早数ヶ月、基本教養の筆記試験は上の下という成績だったが、学科別の実技試験では異例の成績で主席の座を？ぎ取り、一年生から六年生までが一斉に行われる学科内での序列分け試験ですら、今までトップの座に君臨していた六年生を蹴落とし新たな王とまでになった。それ故に好奇の視線などを集めたがゼルブストは傍から見れば一向に気にしてはおらず、驕ることもなく只管に努力する姿勢故に学科内の生徒達から嫌われることもなかった。

だが、嫌われることがなかっただけでゼルブスト自身は社交的な性格でも人間でもなかった。

たった一人で行動し、たった一人で学校から受けられる依頼クエストをこなしていた。依頼クエストとは読んで字の如く、学校側から提供される仕事のことだ。内容は至って平凡な職業ギルドのお手伝いや野良魔物の討伐、中には特殊なモノも存在するが今ここでは触れないでおく。後は迷宮ダンジョンの探索に於ける指定物、魔物の牙や鱗などの素材や鉱石や珍しい薬草などの採掘、採集など多岐に渡る。

依頼クエストを受けるに際しての注意事項は依頼クエストによってその依頼クエストを受注できる人数は決まっている。簡単なモノなら一人から二人、難しいモノなら四人や六人、下手すれば十数人のモノも時たま存在する。ならばその時その時に仲間を集めなくてはいけないのかと思つかもしれないが、これは是でもあり否でもある。否という意味は誰にでも理解出来るから触れないでおくとして、是とはどういうことか。

これは学校というより『マーセナリー』という組織が世界の協約により作り上げられた時に決められた事柄で、マーセナリーに入学する生徒たちは皆若く、それでいて経験が不足している。そのことは一瞬の不注意が死の危険を呼び起こすと言っても間違ではない。ならばそれを未然に防ぐには？ そうして決められた事柄がタッグやトリオ、それから四人から六人で構成されるクライム、既存のクライム二つが一時的に合わさったトラスト、三つ以上のクライムが合わさって一時的に出来るユニオンなど、未熟な者一人が駄目だというのなら数を合わせればいいとの考えから結成されるようになった集団。この考えは脅威の実績を生みだし、今ではこの考えがマーセナリーの中だけでなく冒険者全体に浸透するほど。そして遂にはクライムが十数から成る組織ギルドすらも構成されるようになった。

社会に出てしまえばクライムなどに意味は無くなり、ただ自分達の生存率を上げる為の策でしかない。だが、マーセナリーの中では違う。学校内ではクライムを作り、そしてクライムを組んで依頼クエストをこなせばそれだけで特典が付いてくる。これは他の存在と関わる練習と共に、社会に出てからの必須技能としても推奨されているもの

だ。元々冒険者という職業は他者と関わることが多い、というよりも他者と関わる場合が殆どだ。そんな時に全く会話出来ません等では自分が困るだろうし、またその人間を輩出したマーセナリーに苦情が飛んでくることになる。それを避ける為にもマーセナリー側からしてみれば少しでも生徒達に社交性を上げて欲しいと切に願っている。だからクライムを作るだけで様々な特典が付いてくるというワケだ。

簡単にその特典を説明すれば、まず一点はクライム専用の個室が与えられる。その個室の大きさは各マーセナリーによってマチマチだが、このヴォルスングでは仮眠と取る為のベッドすら備え付けられ、簡易キッチンやシャワー室等の軽い一軒家のような内容の個室が与えられる。他にもクライムに加入しているメンバーが依頼を達成させれば、その依頼の難易度に応じたCPが振り分けられ、それに応じてクライムにレベルが与えられる。初期レベルが1は当たり前であるが、それなりに経験を積みレベル2に昇格され、その報酬としてそのクライムのメンバーは学校内の施設を一部引きの値段で使用可能など。レベルは10まで存在し、10にまで至ったクライムには何でも『シグメント』の国王自身が願いを叶えてくれる、という噂が流れている。噂、というのも、今ではレベル10まで至ったクライムがおらず、最近ではそこまで至るような傑物を含むクライムがなかったさうだからだ。それでもレベル8ではクライムメンバーで住める小さな家が建てられる。これは事実であり、実際に数軒ではあるが学校内に建造されている。

この他にも細かく言えばまだあるのだが今はこの位にしておこう。今重要なのは上記の内容故にマーセナリーに入学した学生はすぐに先輩達が立ち上げた既存のクライムに加入したり、新規のクライムを立ち上げたりなどするのが一般であり通礼。しかし、当のゼルブストは社交性に欠け、また性格故に孤高を貫いていた為にこうで

はなく、ただ一人でクライムで行うような依頼をこなしていた。専らこなしていた内容は採集や採掘などの魔物討伐には関係ないものばかりであり、その御蔭で弱いのではないかと他学科から囁かれていたが対人関係の捕縛などもこなしていたのですぐにそのような噂も消えて行った。

「……授業終了か」

各時間ごとに定められている授業終了の合図である鐘が鳴り響く。マーセナリーは単位制の授業内容を設けており、単位の取得方法は生徒各々の采配に任せられている。勿論課題なども各学科毎に存在し、課題内容によってはクライムのメンバーに頼っても良いという破格ぶりも。だが、そんな内容の課題は極めて難しいものが多く中にはトラストを組んで行われることもある。そうは言ったがそこまで難しい課題が出されることは本当に稀で、殆どの場合は自身一人でどうにかなる場合が多い。

授業が終了したということまで授業を受けていた生徒たちは各々の行動を繰り広げている。同じ学科のクラスメイト達と談笑を交える者もいれば、終了と同時に他学科の友達やクライムのメンバーに逢いに行った生徒。何がしたのか、このような騒がしい場所でも分厚い本を広げたり、さらには眼を閉じて椅子に座っている生徒も。そんな彼らにゼルブストは一瞥もくれないことなく教室内から姿を消す。その姿に女生徒達はカッコイイだとかクールだとかで嬌声を上げ、男子生徒はそんな威風堂々な佇まいに憧れを見出す。これがゼルブストの教室内での立ち位置。一年生にして暗殺学科最強の名手に入れた極科生徒の一人。

そんな存在ならいくら社交性が無くとも周りが放っておくはずが

無く、皆が皆争奪戦のように自身のクライムに入団するよう勧めるだろう。反対にゼルブストが新たに立ち上げたクライムに加入したという生徒達もいる筈だ。事実、そのような生徒たちは数多く存在した。実力は元より、愁^{なまじ}ゼルブストは顔が良い。顔が良いと言ってもゼルブストは前髪を眼前に長く垂れ流して双眸を周りに見せないようにしているが、彼の気持ちの良いテノールの声は数多くの生徒を魅了し、一見は中肉中背の普通の生徒のようにはしか見えないが、服の内に潜む極限にまで鍛えられた肉体は男子生徒からは憧憬の眼を向けられ、女子生徒からは魅惑の対象に映る。立ち振る舞いもがつつくような軽薄な男ではなく、質実剛健を体現するかのような性格で傍に居るだけで安心感を生む。それら全てが相乗効果となり、実力も相まってゼルブストの人気は入学してから鰻登りに上昇した。だが、それら全てはオマケに近く、他の生徒達を本当に魅了したのはゼルブストが持つ双眸だろう。普段は髪に隠れて見えないが、学科内の実技の授業などではその姿が垣間見られる。漆黒の髪色と琥珀色の瞳は美のコントラストを生みだし、またその琥珀色の双眸は鷹のように鋭い。相手をまるで射抜かんとするような視線はそちらの趣味の存在にとっては涎が出るほどのご褒美だ。今ではそつち系の男女が立ち上げたファンクラブすら存在し、会員数は何でも百を軽く超えてるとか。

そんな存在を露にも知らないゼルブストは廊下を足早に歩いていく。周りにいる生徒達はゼルブストが通る度に会話を止めこちらを見る。

学校の校舎は四階の造りになっており、学校の敷地内には幾つか同じ造りの校舎が建築されている。数としては前衛系の学科が集まる校舎が三つ、後衛系の学科が集まる校舎が二つ、どちらにも割り切ることが難しい特殊な学科が集まる校舎が一つの計六つだ。前衛系の学科が集まる校舎が建て三つに並び、その校舎は互いに渡り廊下で繋がっている。対になるように残り三つの校舎も三つに並び、

こちらと同じように三つの校舎が渡り廊下で繋がっている。そして両舎の中央に位置する場所に職員室等の教職員などが詰める建て物。ここには生徒会や風紀委員などの会議室も設置されている。

その内、ゼルブストは暗殺士学科アサシンに学籍を置いているので系統としては前衛系に属される。本来ならゼルブストが目指す場所に向かうのなら態々三つに連結されている校舎を通らずとも、一旦外に出た方が遥かに効率がいいのだが今日は珍しく用事があった。用事と言ってもそこまで大層なものではなく、知り合いが同じ目的の場所の前に一緒に付いて来て欲しい場所があるとのこと。社交性のないゼルブストではあるが、知り合いの提案を無碍するほど心が冷めているワケでもない。どちらかというところ、自身の身内には甘いタイプだ。

だからこそ、いつもなら一目散に外へと飛び出しいつもの場所、若しくは依頼クエストを受ける為の受注場『ジヨンの酒場』と呼ばれる酒場のドリンクバーに顔を出しに行く。最早馴染みとなった受付嬢の舐めるような目線に耐えつつも、数少ない言葉を交わせる友人？だ。それくらいは耐え忍ぶ。そこで一日中ドリンクを飲みながら周りの様子を見ていたりする時もあるれば、一人で達成出来そうな依頼クエストを遂行する事もある。それ以外にも自身の鍛錬や課題や宿題等の消化など。時間を潰す方法など社交性が無いゼルブストでも巨万じまんと存在する。

若干周りの視線に憂鬱になりながらも、知り合いが在籍するクラスへと足を運ぶ。運悪く、“彼女”が今日受けた教室はゼルブストが受けていた教室から最も離れた校舎の四階だ。

それだけ自身の姿が周りに晒される時間も多し。ならばもっと校舎内に生徒達がいなくなる時間に待ち合わせをすればいいのではないかと告げたのだが、どうやらそれだと時間が足りないらしい。そこまで時間を気にするようなら休日やそれに準ずる時にすればという提案も、それだけをこなすにそんなに時間を取るのは悪いと断れ、

結局力押し同然でゼルブストは根負けした。

はあ、と溜息を吐くという一つの行為を取ってもそれには艶があり、周りの女生徒は違う意味の溜息を吐くという連鎖が起こる。ちなみに、何故他学科の生徒が普段は隠れているであろうゼルブストの双眸や肉体等を知っているかと言えば、どうやらそれらの写真が学校内で出回っているらしい。これについてはゼルブストも知っていたというより、撮られている所を知覚していた。が、口には出さなかった。下手に口論にでもなったら面倒だという小心的な想いが原因。

「……ここか？」

今朝伝えられた教室に漸く辿り着き、閉まっている扉を開く。扉の上にはプレートが掛けられており、そこにはこう書かれていた。

『^{ブリーダー}武士学科』、と。

1. 『マーセナリー』（後書き）

久しぶりの投稿。

知っている人はいるんでしょうか、駄文作者の蒼です。

活動報告で宣言した通り、勘違い微量の学園迷宫探索ファンタジーをお送りします。

タグに書いている通り、主人公は最強であり最弱です。これは活動報告でも書きましたがもう一度書くと、対人戦闘は最強ですが、攻撃力の無さから対魔物戦闘では回避壁しか出来ません。

それじゃ仲間は？ となると、これはまえがきで書いている通り、居合“だけ”を極めた迎撃専門の武士娘、詠唱破棄が出来ない、詠唱が長い広範囲殲滅呪文“しか”詠唱出来ないドジっ娘、支援専門である筈なのに前線に出て、しかも殴打で敵を吹き飛ばす怪力乱神な天然治癒師と個性溢れるメンバーです。

こう見ると主人公空気じゃね？ みたいに思われますが主人公も中々に個性溢れます。どこがと言われると今は困りますが、物語が進めば判明することでしょう。

先に明示するのならこの物語は勘違いを含みます。最初の方は全然勘違い物には見えませんが、少し趣向を変えて執筆。微妙な評価なら一般的な勘違い物の書き方にしますが、今はこの書き方でやらせて下さい。

執筆速度は依然変わることなく、大学の準備等に追われるのでそこまで取れません。ですが週一投稿を出来るだけ目指して頑張りたいと思います。

感想、誤字報告、アドバイス等ありましたら気軽に書きこんでください。

ここからは小説内の補足説明を。若干説明不足かなと思う単語等を毎回補足していきます。

偶に同じ内容を本文で説明するかもしれませんが、その時は見逃してやってください。

『魔王』

遙か昔に存在し、地上の魔族と魔物以外の全ての生物を恐怖のドン底に叩き落としたとされる存在。その力は手を振るうだけで地を裂いたとか、口ずさむだけで雷を降り注がせたとか、色々な曰くは残ってはいるが真実かは未だ不明。

現在大陸を四つに分けている四大国の名前となった存在達が滅ぼしたとされている。が、現在は魔王は未だに生きているとの噂も。

『遺されし異物』 アーティファクト

旧暦の時代に手掛けられた武具。

現代では到底複製することは無理な手法や鉱物等が扱われている為、今では宝具や神具、神器とも呼ばれることも。

アーティファクト
遺されし異物の中でも価値は上下し、凡夫な作品は勿論のこと、世界的に有名なものまで多数存在する。

その中でも有名なのが聖剣アロンダイトと魔剣ダーインスレイヴ。他にも多数有名な作品は存在する。

『失われし技術』 ロストテクノロジー

旧暦の時代では普通に扱われていたが、今では廃れたか他の理由により受け継がれなくなった技術の名称。

名前通りの意味合いであり、有名どころを上げれば刻印魔法と呼ばれる存在。魔法、と名付けられているが、工程等が技術に近く便宜

上こちらに含まれる。

『刻印魔法』

旧暦時代では比較的一般出会った技術。

内容は既存の物質に魔術文字を刻み、その魔術文字により効力をその物質に宿らせるといったもの。

例を上げてみれば長剣に頑丈の魔術文字を刻むことにより長剣の強度を上げたり、鎧に魔力反射の魔術文字を刻み、魔法攻撃が苦手な戦士等により有利な戦闘運びが出来るようにと言った所。

この魔法は永続ではなく使う度に消費し、魔術文字の魔力の込め合いにより持続時間は異なる。勿論、消えた所でもう一度魔術文字を刻めば効力は取り戻せる。

魔力文字が刻める容量が多ければ多いほど、それだけ効力は大きくなり、それに比例した持続時間も長くなる。

現代ではこの技術は確かに復元されたが使いこなせる人材は少なく、魔術文字を刻んで貰おうと思えばそれなりの費用が掛かる事を追記しておく。

『消え去りし知識』

エンシエントスベル

こちら文字通りの意味合いで、旧暦の時代に存在した知識。こちらに限っては大半が魔法関連なのが特徴だ。

現代で有名どころなのが契約魔法と呼ばれるもの。

『契約魔法』

旧暦の時代に存在した魔法の一種。

内容は精霊界に住まう各種精霊と契約を施す魔法。契約方法は様々であり、下位の精霊は自身の魔力を糧に力を貸してくれることが多

く、上位の精霊になればその精霊を力で屈服させたり、その精霊が望む物を献上するなど多岐に渡る。ただ、上位の精霊はそれこそ化物染みた存在で契約する酔狂な存在は少なく、殆どの魔道士ソーサラーは中位で留まる。

契約に成功すれば一定の手順を踏むことでその精霊を現実世界に現界させることが出来る。力の貸し方は二通り。一つは自身が扱う魔法の威力を底上げしたり、効果範囲を広げたり等の自分が中心となること。

もう一つは精霊が直接戦うという二通り。

前者は下位及び中位の中堅クラスまで。後者は中位でも上のクラスの存在と後は上位の精霊がこれに当たる。

基本的にこの魔法は広まっており、現代の魔法使いの一種の技能として認知されている。また、何かしたの精霊と契約する事が魔道士ソーサラーの一人前のサインでも最近はなりつつある。

『冒険者』

世界の若者が最もあこがれる職業であるとともに、来るべき魔王との戦いに備えて戦力を整える意味でも普及させられた職業。

仕事の内容はほぼ何でも屋に近い。

この職業になる為の特殊技能等は一切必要は無く、単純に自身が住まう行政機関に書類を提出するだけで可能。他の仕事との副業も可能であり、登録に関するデメリットは存在しない。ただそんな冒険者に仕事を頼む存在は数少ないだろうが。

『マーセナリー』

冒険者を目指す若者が16歳から入学する事が出来る六年制の育成学校。

進級する為には単位が必要であり、大学が採用している単位制の学

校でもある。単位取得方法は様々で筆記は勿論のこと、実技や迷宮ダンジョン探索、素材の採集等々多岐に渡る。

クラスは学科別に分けられ、その学科も前衛系学科、後衛系学科、特殊系学科の三つに分けられる。前者二つは文字通りの存在で、最後の特殊系と呼ばれるものは一般的に判断が付き難いものが多い。例えば退魔師エクスジストや舞踏士ダンサー等。

『序列分け試験』

学科内に於ける順位を決定づける試験。これにより大抵は少ないクラスで三つほど、多いクラスなら十ほどに分けられる。

この試験は出来るだけ自身と実力が近い者同士と勉強や訓練をした方がより切磋琢磨されるといふ方針から来るもの。

『トミニオンス極科生徒』

各学科の序列分け試験のトップ、つまりは主席にこの称号が与えられる。

簡単にいえば各学科最強の存在。同じ学科内の生徒はおるか、他学科の生徒からも羨望と嫉妬の視線を集める生徒達の名称。

基本的上位学年者なるこの称号だが、ゼルブストは異例の一年でこの称号を手にした。

この称号を持つ者は外のクライムなどからの推薦などが多く、またすぐに外の実戦に出ようと活躍できるだけの力量を持ち得る。それだけゼルブストの化物ぶりが窺える。

『クエスト依頼』

色々な依頼主から発行される仕事。

学校外内ではそれこそ単なる仕事だが、マーセナリー内ではもう少

し違った意味合いを持つ。

マーセナリー内で依頼をこなせば、それに応じたCPを受け取る
ことができ、これを溜めることによってクライムに様々な特典が付く。
ちなみに学校側が提供する依頼の中には超難関なものも混じっている
こともある。

『クライム』

冒険者が四人から六人からなる集団の名称。

学校外では特に意味は無く生存確率を上げたり依頼達成率を上げた
りする信頼出来る仲間という印象だが、マーセナリー内では先ほど
でも言った通り特典が付随される。

特に顕著なのがクライム毎に個室与えられるという点。

ちなみに二人の場合はタッグ、三人はトリオ、クライム二つが組め
ばトラスト、クライム三つ以上でユニオン、十以上のクライムが集
まり、一種の組織を結成すればギルドとなる。ギルドまで成長する
とクライムという概念は崩れ去り、その集団で色々な人間とクライ
ムを組んだりする。

こつからは魔法の効果の説明。

別に今回は必要ない気もしますが、一応の補足を。

>テレポート/瞬間移動<

”消え去りし知識”の一種。中でも難易度は高い。

内容として予想されているものは、一つ目が空間同士を繋ぎ合わせ
ることにより離れた空間の距離を零にするというもの。

二つ目は空間の座標を認識し、その座標の空間に自己を投影する
というもの。

どちらにしても現在の魔術理論では不可能で、死者蘇生や不老不死、時間停止等の神の御業の一種と現在では認識されている。それでも飽くなき探究心を向ける魔道士達には流石ソイサラという他ない。

>ブレイブフォース/身体強化<

一般的な身体強化魔法の一種。身体の一部を強化する>イーグルアイ/鷹の眼<や>ソニッククラッシュ/瞬速撃腕<等のようなものはなく、身体全体を強化するもの。

長所としてはバランスの良い強化魔法であり、短所として身体一部を強化をする補助魔法に比べ効力が弱いと言った所。

ちなみに先ほど上げた魔法は前者が視力強化、後者が両腕の俊敏強化の効力を持つ。

2・交渉と行動（前書き）

この物語に関する国名、人名等は現実世界のモノとは関係ありません。云わばフィクションです。

それらに関する苦情等は一切受け付けませんのであしからず。

特に問題ないようでしたらスクロールしてください。

上記の文を認められない方はプラウザバックを推奨します。

2・交渉と行動

教室の扉を開ける音というのは予想以上に音が響く。それ即ち中に居る生徒達視線を集めるということだ。

その行動は今回も例に洩れず、ゼルブストが教室の扉を開き潜ろうとした瞬間、生徒達の視線はゼルブストに釘付けだった。毎度の事ながらゼルブストはそれらの行動に辟易としながらも、約束の相手である女性の姿を探そうとする。

だが、その必要は無かったようだ。

「少し遅かったですね。何か問題でもありましたか、ゼル？」

ゼルという名前はゼルブストの愛称に当たる。

愛称とは文字通り仲の良い相手が呼ぶ名前で在り、所謂渾名に近いものだ。そんな名前で呼ぶほど、その生徒とゼルの間柄は良いというもの。

「……別に。ただ俺の教室からここまで距離が離れていただけだ。

というより、その情報はちゃんと前以て伝えていた筈だろう？」

「ええ。ですが心配というものはそんなものに縛り付けられる感情ではない、ということですよ」

ゼルの前で立ち止まる女生徒。

彼女が持つ綺麗な漆黒の髪は、彼女の故郷では烏かいつの濡れ羽色と称されるほどのもので、その国の女性の理想美であるらしい。そんな美麗な髪を一本の髪留めで括り付け、総髪そうがみとしており、ゼルを見る彼女の瞳は切れ長。その容姿は可愛いというよりも綺麗、美女というよりも美人と表現する方が彼女に限っては正しい表現だろう。

ゼルの身長は彼の年齢では男子の平均値である170と少しなの

だが、彼女は女子の平均値を上回りゼルの目線ほどの高さだ。

傍から見ればクール系男子とクール系女子の御似合いカップルの様にも見え、周りからしてみれば嫉妬モノなのだが誰一人としてそのような眼では見ない。いや、確かに少しの嫉妬は在るだろうが、周りの生徒達は二人の関係を一応は納得しているらしい。

「……学校内で心配事など無用だと何度言えば解る？ 俺なんかを心配している時間があるのならもっと自分の為に時間を使え。時間の無駄 とは心配されている身だから言わないが、シズクならもっと有意義に使えるだろう？」

彼女 シズク「シズドウはこのマーセナリーに通うゼルと同期の一年生であり、また武士学科フシドクの期待の新人でもある。

ここ武士学科フシドクが基本的に教える内容は極東の国『ジパング』が生み出した武器等の扱い方なので、この学科に通う生徒の大半はジパング出身者だ。当の本人であるシズクも例に洩れずジパング出身者であり、難儀な癖というか戦闘方法を除けば優秀な生徒である。

そんな学生の模範的な生徒にこれほど心配されるゼルは男冥利に尽きるモノなのだろうが、如何せんゼルからしてみれば行き過ぎたお節介に過ぎず、余計な御世話と内心では思っている。思っているだけで声に出さないのはシズクが本心からゼルの事を心配しているのを理解しているからであるからだ。

それに戦闘力から見てもゼルは他人から心配されるほどひ弱でなく、反対に強者の座に昇り詰めた存在でもある。そんなゼルを心配するのは些か筋違いなものではないかと周りの生徒達も内心では思っている。だが誰も口に出さないのはそれが無粋だと理解しているからで。

「ゼルは気にしなくてもいいんですよ。これが私が思いつく限り一

「番有意義な時間の使い方ですから」

朗らかに笑うシズクを見ると、これ以上言葉に出すのは無粋というよりも無意味と悟ったゼルは口を噤み鼻を鳴らす。

「……そろそろ行くぞ。いつまでもここで話をしても周りの邪魔だからな。お前達も迷惑だったろう？ 済まなかったな」

「この程度の事で迷惑だと思っ人なんてここにはいませんと思いますけどね」

「……それでも口に出すのが人情というものだ」

ゼルはシズクを引き連れて教室の扉を潜り抜ける。来た時のように一人だけでなく二人で。

「……今日の用事はエミルとレイナは連れてこなくて良かったのか？」

もうこの場所には用は無いと言わんばかりにゼルは校舎の外へと足を向ける。

周りの視線を若干鬱陶しがっていることを知っているシズクは、ゼルのそのような行動に口を出す筈もなく淡々とその傍に近寄る。その距離は肩と肩が触れ合うほどで、どうみても恋人関係の距離。しかし、二人の間にはそのような関係は無い。一方はそうなることを望み、日々精進しているようだが。

だが、そんな距離に詰められようとゼルに変わった反応は無く、さも当然とばかりの表情で己が道を突き進む。

「エミルは既に準備しているとのこと。今回の約束の主演に当たるレイナに知られるのは拙いですが」

「……準備？ それにレイナが主役ってどういう意味だ？」

「その反応から見るに、やはり知りませんでしたか」

嘆息気味に眼を伏せる雫にゼルは若干憮然とするも、彼女がそう言った表情する時は大抵ゼル自身に問題があるということ。それは彼女達と交わるようになって理解出来始めた事柄だ。間違いなく今回もゼルに問題があるのだろう。

だが、問題があるにせよゼル自身に自覚はなく。自覚が無いからこそどうして自分が責められているのかも理解出来る筈もなく。だからこそゼルは現状を少しだけ理不尽と感じていた。これが理由などを既に説明していたのなら謝る等の行為に移れるのだがそうにもいかず。

だからこそ、ゼルはそのような視線を向けられる視線の理由を知りたかった。

「別にそこまで大層な問題ではありませんし、また同じようにレイナに危険が迫っているというワケでもありません。ですので眉間に皺を寄せるのは止め、肩の力を抜いたらどうですか？」

「……む」

「……いくら仲間でもそのような心情を自分以外の存在、それも女性に向けられると少し嫉妬してしまいますね」

「……どうかしたか？」

「いえ、何でも」

シズクの些細な表情に目敏くも気付くゼル。それを指摘するも、シズク自身は何でもないと首を振る。追及するという手立ては残っているものの、シズク本人が何でもないというのだから無理に聞くのも憚れる。

数秒の間、ゼルはシズクの瞳を覗きこむ。人間というものには得てして心模様が”眼”に宿るものだ。その言に虚が在るのなら瞳には虚の光が宿るし、心が揺れ動くのならそれと同じように瞳の光も揺

れ動く。目は口ほどに物を言うという言葉はそう言う事から造り出された諺であり、同じような意味合いとして目は心の鏡、目は心の窓、目が物を言うなどと異音同語が造られるほど昔から言われ続けられている程だ。それほど昔の人も人間の心の機敏等は理解していたのだらう。

普通の、出逢って数日しか時間が経過していないような交友関係ならば気ままずくなってしまふ空気だが、ゼルもシズクも互いの事をそれなりに知り尽している。

時間こそ余り経過していないが、それを霞ませるほど密度を共有をしている。よって、二人の間に流れる空気は堅いものではなく、反対に柔らかいものであった。

「……………で、結局どういうことなんだ？」

嘆息気味に、ゼルはそうでありつつも自分に非が在るのだろうと予測し、躊躇いながらも再度尋ねる。

「単に五日後のヘリオスの日がレイナの誕生日だというだけですよ」

「……………それは本当か？」

「はい。ちなみに私の誕生日が三ヶ月後、エミルが冬季休暇明けです」

「……………そうか」

ここアルカディアは一日を二十四時間に、一ヶ月を三十日、一年を十二ヶ月とし定め、一週間をヘリオスの日、セレネの日、プラミアの日、ヒュドルの日、デンドロンの日、クリュスの日、ゲーの日と世界間での共有暦法として規定されている。一年間の初めの月をジュピターの月、それからユノの月、ミネルヴァの月、アポロンの月、マーズの月、ヴィーナスの月、マーキュリーの月、ディアナ

の月、ネプチューンの月、ケレスの月、ヴァルカンの月、ヴェスタの月と名付けられている。

そして、今の月はヴィーナスの月であり、シズクの話が本当ならば彼女の誕生日がネプチューンの月、エミルがジュピターの月にあるということだ。

シズクから聞いた出来事に幾分か驚くも、すぐに再起動を果たしこれからのことを思い馳せる。

内容は当然五日後に迎えるレイナの誕生日について。ただの知り合いならば祝いの言葉とそれなりの贈り物一つで済むのだが、相手は”クライムを組んでいる”仲間の一人。手抜きは贈り物では話にならないし、何よりゼル本人が納得しない。

どうしようかとその場に立ち止まり考え倦ねるが、一考に思い付かない。

「そんなに悩まずとも……。その為の用事なんですから」

そう声を懸けてくれたシズクはゼルからしてみれば後光が降り注いでいたことだろう。

思わず振り返ってシズクを凝視したゼルは悪くない。彼此十六年の月日をこの世で過ごした彼だが、一向に他人と付き合う、他人に合わせるということは上手くならなかった。まともに対応出来たのがこの学校に訪れる前までは両親と幼馴染、それに幼馴染の家族といった極少数。言ってみれば他人と接する経験値は全くないと言っても過言ではなく、そこに異性への贈り物を考えるだなんてとんでもない所業だ。

「……成程、漸く理解出来た。それで、場所は？」

「『ルフェグナーデ』へ」

「……何故そこに？ レイナはそれなりの装飾品を持っていただろ

う、それも高位魔術付加された」

「ええ。ですがこの間の探索の時に良い物を採掘出来たんですよ」

そう言つて広げた掌の中に合つたのは、煌びやかに輝きつつも魔力の凝縮が感じられる親指の爪ほどの寶石。

「……これは、フェアリーストーン精霊魔石か？」

「はい。それも高位の中でも上位に食い込む程の」

フェアリーストーン精霊魔石とは異界に住まう精霊達が好む宝石の名称で、所有するだけで魔法発動に負担する魔力、精神力の消費を減らし、契約された精霊の支援、召喚の効果を上昇、更には新たに契約する精霊を呼び出す時にこの寶石を持つておくだけで上位の精霊を召喚出来たり、契約出来たりもする。その為、このフェアリーストーン精霊魔石は魔道士を初めとした冒険者の中では人気が高い。また、フェアリーストーン精霊魔石は希少価値が高くそう簡単に人目が触れる場所で採掘できることは無く、大抵は秘境や魔境と呼ばれる場所で、しかも産出量が少なく、どの時代でも求める声が多く、それらのことが相まって市場での相場は馬鹿みたいな物となっている。

こうしてシズクが持つ親指の爪ほどの大きさでも下手すれば小さな家が建つかも知れないほど、その価値は大きい。事実、装飾品に使用する為にカッティング、コーティングされた物を除いた天然物を見たのはゼルも初めてだ。

「……それにしても綺麗に済んだ虹色だな。色は真珠パールに近いか？」

「そうですね。私も余り宝石類には詳しくないですが、この宝石に価値があるというよりも綺麗だということだけは解ります」

「……そうだな。それに真珠パールはヴィーナスの月の誕生石だった筈だ。丁度良いと思わないか？」

「はい。偶然この間の迷宮ダンジョンで発見した時は本当に驚きました。まあ

今の今までゼルに話す機会が恵まれなかったので遅くなりましたが」「……ということはエレナは既に知っているのか？」

「勿論。採掘した直後にエレナは近くに居ましたから。反対にゼルとレイナは二人一緒に居たので報せることは出来ませんでしたけど。それについては謝っておきます」

「……いや、別に問題ない。というより、よく見つけた瞬間にそのまま考えが至ったな。本当に感心する」

素直にゼルは感心し、その視線を感じてシズクは頬を赤らめた。どの時代の人間も同性異性関係なく、他人から褒められると嬉しいものであり、それが自身が尊敬し懸想している相手なら尚の事。

恥ずかしそうに身を縮めつつも、手に持つ宝石を大事にそうに懐に仕舞い込む。

確かに両者共に大事な贈り物プレゼントが仕舞い込まれたのを確認し、声を上げた。

「それじゃ向かいますようか」

『ルフェグナーデ』

それはここヴォルスング内で経営されている装飾品専門店。品物としては単純なファッション目的なアクセサリーから迷宮探索ダンジョンの御供となる魔術加工が為されたアクセサリー。他にも魔術文字を刻んでくれる数少ない刻印魔道士インクレイバーが店長をしている他、学校外で活躍する装飾師オナメントなど、それこそ職人プロと言っても間違いでない人物達が経営する学校内で最も財産が吹き飛ぶ場所の一つだろう。

その中では学生の姿もチラホラ見られ、前線で働く職人達が次世代を担う若者がいないかと日々眼を光らせ、目に止まったものは問答無用で連れていかれることでも有名。ただ、それらの無茶振り、

多額の費用を懸けるだけあって、売り出される品物は最高級の品質であり、時たま学生でない人間も態々足を運ぶほどの実績だ。

ただ単に売り買うする他にも、装飾品の依頼や宝石等の鑑定も請け負ったりと仕事内容は多岐に渡る。

今回、ゼルとシズクが依頼する内容はその中でも珍しい”魔術文字が刻まれた”装飾品の製作の依頼だ。元来、そういった装飾品を製作する依頼は多額の費用（それでも普通に購入するよりは安い）と店長の流儀なのか『刻印魔法込みの製作依頼の場合にや、この俺が納得する原料を持参しやがれ』という職人気質というかなんというか判断が付き難い言葉がデカデカと店内の壁にチラシで貼られている。なのでここに通う学生は大抵手を出すことが出来ず、洪々店に置いて在る品物を手に取り購入するというワケだ。

こつばかりデメリットばかり並べると本当の裕福層にしか手を出すことが出来ない風に聞こえるが、言い方は悪いが安い品物だつて置かれているし、刻印魔法が施された品物のちゃんと依頼等^{クエスト}を達成していれば買える値段に設定されている（それでも流石に高位の物は無理だが）。

他にも単純なファッション関連のアクセサリーも置いているので、店の客足が途絶えることは滅多にない。

「で、返答は如何ほどに？」

「ハッ！ 流石にコイツほどの物を持ってこられりや俺も請け負うしかねえよ」

「では」

椅子に座る三十を過ぎたくらいの男性が鷹揚に頷いた。

室内を照らす光は優しく辺りを包み、彼の象徴たる深紅のように真っ赤な赤髪を染め上げる。薄地の生地は彼の持つガタイの良い体型に押し上げられ盛り上がり、いっそのことそれを脱ぎ捨て羽織っ

ている皮のジャンパーだけの方が良いのではないかと思うほどの不自然さを醸し出していた。

外見はどこからどう見ても戦士か武闘士の筋力第一の前衛職、後衛で考えても鍛冶師ブラックスミスといった膂力が必要な職業だと誰しも錯覚してしまうだろう。だが、現実には反して、彼ことヴァルドⅡセイクリッドこそがこの『ルフェグナーデ』の店長であり、世界規模でも珍しい刻印魔法の使い手、刻印魔道士なのだ。

「任せておけ。この”刻み込む者”じきじきに仕上げてやつからよつ！」

「よろしくお願いします。数は四つ。効果は先ほど話した通り、私達の戦闘方法、技能等に際したモノで。金額の最大値も先ほど提示した額で構いませんね？」

「ああ。形状はネックレス型で良かったな？」

「それが標準スタンダードですし、一番邪魔になり難い装飾品でしょうから。後衛のレイナは兎も角として、前衛を駆るゼルには指輪も邪魔になる可能性も少くないですからね」

「ククツ、極科生徒も女にやタジタジか？」

「……どうだろうな」

「ハハッ！」

交渉事ネゴエーションは全てシズクに任せきりになるゼルだが、別段苦手というワケでもない。かといって得意というワケでもないが。ゼルの場合、彼が持つ圧倒的な存在感により相手を呑みこみ、その威圧感を最大限に用いた力押しに近いモノがゼル流の交渉ネゴエーションとなる。それは力押しだから駄目だということではなく、自分が使える武器を最大限に利用しているだけであり特に問題にもならない。ただ、やはりスマートさに欠けるだろうか。

反してシズクの場合は存在感などは一切持ち得ず、彼女が持つ知略を前面に押し出し、舌先を使い相手を惑わし、自分が有利となる

戦局に誘導するタイプであり、こちらが一般的な交渉ネゴーションに成り得るだろう。

そんなヴァルドとの交渉ネゴーションもシズクの満足いく結果で終わりを告げた。

二人はその場を後にし、ルフエグナーデの特別応接室から退出し、そのまま装飾品等を眺めることなく店内から姿を消す。

「それにしても流石はルフエグナーデの人員ですね。カッティング、コーティング共に難しい精霊フェアリーストーン魔石を四日で仕上げ切りますか」

外を見上げれば夕焼け空が二人を迎える。

「……この後はどうする？ 解散するか？」

「一応小物も贈り物用として見ておきますけど、一緒に来ますか？」

「……ああ。このままじゃ俺は何もしてないことになるからな。せめて個人から贈れる物を用意しておかないと、な」

「それではこのままデートと洒落込みましょうか。勿論ディナーも」

「……仰せのままに、お姫様」

世界は流転する。

絶対的に朝が訪れ、不可侵な夜が訪れるように。

時の針はその動きを止めることなく世界が終焉を迎えるその日まで、一秒たりとも遅れることなく正確に刻み続ける。

それこそが世の常。

時を刻むこそが世界に住む存在全て平等に訪れる概念。そして、

その先に在る”死”こそが世界に住む存在全て平等に訪れる真理。

闇に潜む獣。

それ以外に形容する事の出来ない姿で、ゼルは森の奥深くで身を隠していた。

息を殺し音を殺し気配を殺し自己の存在を殺す。これこそが暗殺^{アサ}士の基本であり奥義。相手に感知されることなく相手の息の根を止める。それこそが最高であり最強、最低であり最悪、最凶であり最狂なのだ。

ゼルの視線の先に在るのは幾人かの人影。このような森の奥深くを根城とする存在だ。碌な存在がいないのは明らか。事実、ゼルが見つめる先に居る存在達は巷で悪事を繰り返している犯罪者達。犯罪者として強盗罪、強姦罪、逃走罪、公務執行妨害罪、拳げ句の果てには殺人罪と今のご時世では珍しい所謂屑のような存在達だ。

構成は六人で構成されており、銃火器を使う銃装士^{ガンナー}が一人、魔道士^{ソーサ}が一人、残り四人が前衛となった中々バランスの取れた組み合わせだ。それもその筈、彼らは元々冒険者であり本来ならばこのような愚を犯すような人達ではなかった。しかし、運命は残酷か彼達に大いなる災いを振りかけた。

まず最初に依頼主^{クライアント}からの報酬を受け取ることが出来なかった。これは彼らに落ち度は無く依頼主^{クライアント}に問題がある。彼らが提示された依頼は依頼主^{クライアント}の街から街へ移動する間の護衛であつたらしい。これも何の問題もなかった。彼らもそれなりの冒険者達であり、数年間は一緒に依頼^{クエスト}をこなしてきた仲間だ。意思疎通も完璧だったし装備も入念に準備した。襲いかかつて来た魔物も全て実力で排除した。

しかし、途中で盗賊と思われる集団に遭遇する。実力的にいえば格下の相手だが如何せん数が多かった。幾つかの傷も負うも致命傷を受けることなく、また依頼主^{クライアント}にも傷一つ負うことは無かった。だ

が、ここで問題が発生する。どうやら先ほどの盗賊団との戦闘中に積荷であった荷物が数点盗まれたらしい。依頼内容は依頼主の護衛クライアントであって積荷の護衛は対象外だった。しかし、冒険者の常識としては積荷も勿論護衛する。

そこで依頼主は声を荒げて冒険者達に暴言を吐く。積荷が盗まれたのだから報酬は無しだ、と。勿論これには冒険者も反論する。確かに常識ではそうだが、それは絶対に遂行しなくてはいけないものではない。それだったら最初から依頼内容に明記しておけ、と。両者は対立し言葉の応酬は激化。普通ならば冒険者の言い分が通る筈なのだが、如何せん相手が悪かった。

相手はその街周辺の界限では小さいながらも名の通った商人ギルドの長で、盗まれた積荷は希少価値の高い刻印武装だったらしい。結局その一言が決定打となり冒険者達の報酬はチャラとなり、最終的に流れという結末に終わる。

しかし、冷静に考えてみると可笑しい。誰でも疑問が湧くやり取りで冒険者達は別れた後、冷静になってから考え、そして行動を開始する。

まず口先三寸で丸めこまれたのは自分達に落ち度と言えないような落ち度があつて負い目を感じていたからだ。そこはまだいい。だが、彼らが可笑しいと思つたのは積荷を盗んで行つた盗賊団の方である。襲つてきた集団は山賊崩れの盗賊団にしては些か連携が取れており、中心に立つて指揮を執る存在もいた。撤退時も潔く、盗賊特有の卑しさを全く感じられなかった彼ら。

何かある……

疑惑を胸に依頼主の滞在する高級宿に忍び込むと、そこにいたのは依頼主であったギルド長と、自分達に襲いかかって来た盗賊団の指揮を執っていた男が仲良く酒を酌み交わしているではないか。詳

しく耳を澄ませて話を聞いてみると、どうやら今回の襲撃は元々クラ依頼主と盗賊団はグルだったらしい。所定の位置に盗賊団を配置し、その場所を通過した時に盗賊団を襲わせる。盗賊団の人間が勝てるレベルならそのまま冒険者達は抹殺。無理ならば撤退、その時に指定している積荷を盗ませる。これにより、冒険者が勝とうと負けようと報酬を為しにできる流れを作りだせる、と言った風に。普通なら反論する道筋もあるのだが、この界限では名の通っている商人ギルドの長に反論出来る存在はこの辺りにはいない。それを見越しての犯行だろう。事実、それだけ商人ギルドの長というのは権力を持つ。それがどれほど小さいギルドであろうとも。

それに盗賊団もどうやら依頼主が持つ私兵団のようであった。それならばその私兵団に守らせればと疑問が湧くのは当たり前。それに返って来る言葉が

「人の命とてタダではない。ならば金の懸からない赤の他人を使うという案はすぐに思いつくだろう？ 冒険者なら飴に群がる蟻のように大勢いるのだから、使える”道具”は使わんとな」

この言葉に流石の冒険者達の堪忍袋の緒が切れるというもので、そのまま二人が歓談していた場所に強襲、そして手に持つ武器で惨殺。

それから後の展開は予想だにし易く、力に溺れた存在の末路を辿り、最終的な現状がこれだ。

今の彼らに怖いものは何一つ存在しない。襲いかかって来たものは皆潰し、自身から沸き出す欲望を満たす為に暴虐非道の限りを尽くし、誰一人として俺達には敵わない。そう、彼らは慢心していた。だからこそ、迫り来る死の足音が聞こえなかった。

「今……何か聞こえな」

「ん？　どうかしたか？　っておい！　ライアス！　返事を　」

音もなく、ただその場で崩れ去る元冒険者の二人。

刈り取ったのは最強に限りなく近いゼルブスト「レーベン。別に刈り取ったといっても殺害したワケではない。身動きを封じる為に四肢を破壊しているが生命活動に異常はきたさない。ただ、元通りに回復するかは解らないだけ。回復の見込みすらもないかも知れなく、間違いなく冒険者という道は途絶えてしまっている。

だが、ゼルは特に心を動かすことなく残りの標的の場所に静かに移動した。ゼルにとって彼らは倒すべき敵であり、情けを懸けるような相手ではないのだ。敵は冷静沈着冷酷非道を以て対応する。

ただこれだけの信念を以てゼルは行動を続けた。

ゼルにとって、彼らは正義でもなく悪でもない。

ただの敵なのだ。

「おいおい」。まさか二人して仲良く連れションか？　どんだけ仲が　」

彼にとって大切なのは自分と身内。

それ以外はもうどうだっていい。

「……どこか可笑しくないか？　二人は別にしてもどうし　」

同情する気持ちもどこかであつたかもしれない。だが、それもこっぴどくして相対する前の話。

今は単なる敵としてかその瞳には捉えていなかった。

明日を生きる為に彼らを贄としようとした商人と同じ。そうした場合がどこか頭の片隅に過つたからかもしれない。もしかすると、どんな存在も他者を贄にすることでしか生きていけないと既に悟っ

ていたのかもしれない。はたまた、自分と身内以外はただの動物としか思っていないのかもしれない。

「キーガン、ど」

「ありえ」

ドサつと最後の敵が地に伏せた。

「……ミッドコンプルー依頼完了。これより帰還する」

未だ目覚めない元冒険者の犯罪者達を一か所に集め、予め用意しておいた特性の魔力縄で縛り上げていく。普通ならば縛り上げている時の衝撃等で目覚めるのだが、ゼルの攻撃により深い眠りに強制的に落とされているようだ。

面倒臭いが、この六人を連れて帰らないことには依頼完了には至らない。勿論、近くに馬車と馬を用意しているので左程の苦勞には成り得ないが。

「……明日は講義はなかったな。少しノンビリして帰るか」

荷台に犯罪者達を放り込み、ゼルはそう呟く。

その呟きも、漆黒の闇世の中に溶けて消えていった。

2・交渉と行動（後書き）

とりあえず遅れることなく投稿出来たかな？

約束通り一週間後に更新する事が出来た、蒼です。

それにしても中々物語が進まない。というより、説明ばっかだな、この小説。出来れば次くらいに戦闘シーンを入れたいな。でも内容から解る通り、何故か物語開始早々に誕生日が（笑）

本当に何で俺はこの話を突っ込んだんだろ？ 多分メインキャラ紹介の為に書き始めたイベントだった気がするんですが……

とりあえず戦闘シーンは入れられたから良しとしようかな。

……戦闘？

次話くらいでメインキャラを入れられればなあ、と書いています。ついでに、次の更新も来週となっておりますので、そのところはご容赦を。

ここから先は恒例の単語等の補足を。

『一週間の区分』

ヘリオスの日 日曜日

セレネの日 月曜日

プラーミアの日 火曜日

ヒュドルの日 水曜日

デンドロンの日 木曜日

クリュスの日 金曜日

ゲーの日 土曜日

『一年の区分』

ジュピターの月 一月

ユノの月 二月

ミネルヴァの月 三月

アポロンの月 四月

マーズの月 五月

ヴィーナスの月 六月

マーキュリーの月 七月

ディアナの月 八月

ネプチューンの月 九月

ケレスの月 十月

ヴァルカンの月 十一月

ヴェスタの月 十二月

『ルフェグナーデ』

ヴォルスング内で経営されている装飾品専門店。

品物としては単純なファッション目的なアクセサリーから魔術加工が為されたアクセサリーまで色々。

店長が刻み込む者まで呼ばれるほどの凄腕インクレイバー刻印魔道士で名前をヴァルドゥセイクリッドという。

ルフェグナーデを切り盛りする店員達は皆職人の集まり。プロ時たま学生も見られるが、それは将来性を買われ強制的に手伝わされている。まあこれほどの場所で働いて腕を磨けるのだから学生達にとっては願ったりも叶ったりの状態。

店長の流儀で『刻印魔法込みの製作依頼の場合にゃ、この俺が納得する原料を持参しやがれ』とのコメントが店内に堂々と貼られており、初めての客は大抵眼を瞬かせる。

ちなみに店長であるヴァルド＝セイクリッドはどっからどうみても筋骨隆々のマッチョガイにしか見えないが、中身は魔道士に近い。深紅の髪とパツツンパツツンの服がトレードマーク。

『フェアリーストーン
精霊魔石』

異界に住まう精霊達が好む宝石の名称。所有するだけで魔法発動に負担する魔力、精神力の消費を減らし、契約された精霊の支援、召喚の効果を上昇、更には新たに契約する精霊を呼びだす時にこの宝石を持っておくだけで上位の精霊を召喚出来たり、契約出来たりもする。勿論、それ用にコーティングした場合はそれ以上の成果を発揮する事も。

だが、これだけ有用ならば価値は比例して高くなり、値段は累乗して高くなる。

採掘場所は基本的に秘境や魔境といった場所であり、シズクのように普通の迷宮で採掘出来ることは滅多にない。

勿論大きさも普通は小指の爪よりも小さいくらいで異称として精霊の涙と言われたりするほど小さい。

重ね重ね言うが、シズクが手に入れられた精霊魔石は奇跡に近い、というよりも奇跡。

3・誕生日（前書き）

この物語に関する国名、人名等は現実世界のモノとは関係ありません。云わばフィクションです。

それらに関する苦情等は一切受け付けませんのであしからず。

特に問題ないようでしたらスクロールしてください。

上記の文を認められない方はプラウザバックを推奨します。

3・誕生日

埋没していた意識が覚醒し、身体が有する五感からの情報が脳へと伝達され始める。

瞳を開け、日々の日課である鍛錬へ向かう準備　の前に、ゼルは視線を壁に向けた。そこに掛かっているのは世界の日付を示すカレンダー。今日はヴィーナスの月第三週のヘリオスの日。忘れられない用事でもあるのか、珍しくその日日には印が記され、同世代からすればやや達筆な字でこう書かれていた。

『レイナリリユクシードの誕生日』

ヘリオスの日は基本的に休日とされ、世界中に住まう人々は皆が骨休めをする曜日だ。その曜日こそが稼ぎ時という職種の人々もいるので、全員が全員休日とは言い難いが、それでも大半の人の立場からしてみればそうなる。

ここヴォルスングもこの曜日は基本的に休日とし、授業などは殆どない。中には補習の生徒や特別課題を課される場合もあるが、それも特別な場合に限る。大半の生徒達は世界中の人々と同じように今日という日を満喫し、明日から消費される精力を蓄えるというワケだ。真面目な生徒の中には、今日という休日を利用し遠出の依頼クエストを達成する為に使う利口な生徒も屡存在する。

ゼルも時偶それらの生徒同様に使うこともあれば、身体を休める為に使うことも。

しかし、今日は珍しくも用事が入り、それはとても大切な用事。

自分みたいな面白みの欠片のない輩でも、大切な仲間だと声高に叫んでくれる優しい仲間の誕生日。

「……そろそろ時間か」

雲一つない蒼穹の空を見上げれば、既に燦々と輝く太陽は真上。昼食は取らず、クライム専用にと与えられた部屋で細やかながらも盛大なパーティーを催す予定だ。ゼルは手伝う事が出来ないのでレイナをその場所までエスコートする役割を与えられ、件の料理についてはシズクが自国特有の米という穀物を使った料理を作ると言っていたが、些か誕生日には相応しくないとのことだ。結局、エミルが中心となり、それをシズクがサポートするという形に落ち着いたらしい。別段二人の料理スキルを疑うことは無かったのでゼルは口を挟まずその成り行きを傍から見物していた。

料理の用意については、前日の昼からエミルは授業を休んで誕生日ケーキを作るほど力の入れっぷり。シズクも同様に必要な物資の買い出し等に追われ、ゼルはと言うと、それらがレイナの眼に入るの拙いということだ。丸々一日を消費し、レイナを引き連れて依頼を消化していた。連れていく際に一言二言の質問はされたが、それはゼルの機転により回避され、特に疑問を抱くことなくレイナはゼルの後に続いた。

依頼の内容も然して難しいものでなく、単純な迷宮に棲息する魔物の討伐。場所が場所なだけに辿り着くのに時間を要したが、二人は傷を負うことなく帰還に成功する。その時に明日の用事を聞き、特に用事がないこともゼルは確認済み。ならば、とエミルから与えられた仕事をこなすべくゼルはレイナに昼頃に向かいに行くとの旨も既に伝えて在る。後はレイナの寮部屋まで趣き、そのままパーティーへと雪崩れ込むだけ。

懐に手を入れ、一つの物体を取り出す。

古ぼけた懐中時計。誕生日の祝いと、幼馴染から贈られた一品。珍しくも幼馴染に感謝の念を覚えたあの日。

「……ジャスト十二時だな」

感傷的に成りながらも、自身に与えられた役割は全力で全うするのがゼルブスト「レーベンの生き様だ。

向かうは女生徒が住まう寮。流石に男子であるゼルは中まで入ることは規約違反を犯してしまうので、寮監である教員に一声掛けて呼んで貰うのが習わし。因みに、女生徒自身が外まで歩き、そこから男子生徒を中に連れ込むのはアリとされている。反対に男子寮の場合は特に決まった規約はない。これを男女差別と謡うか、常識と謡うかは人それぞれだろう。

正直な話、ゼルからしてみれば寮監の眼を掻い潜って女子寮に侵入すること位は朝飯前の所業だ。絶対的な身体能力も然る事乍ら、自身の気配を殺すことは暗殺士アサシンにとっては必須技能。それをゼルが習得していない筈もなく。極科生徒であり暗殺士学科トップであるゼルはこの技能に関して学校内最高峰と考えても間違いでない。そんな化物性能を持つ存在を誰が感知できるのか。もし寮監が感知できるのなら、その寮監はこんな所で仕事をせずに王宮の警備部隊の隊長職くらいには抜擢される。

閑話休題。

それはやってバレルことはないが良心の呵責がこれを責め、ゼル自身そついった犯罪行為をする為に己を磨きあげた訳ではない。素直に寮監に話を通し、レイナを呼びつけて貰う。

この寮に訪れる異性という存在は得てして少ない。理由としては気恥かしいというのが一点、面倒というのが一点、他にも他の男子生徒の怨嗟の視線を真っ向から浴びなければならぬなど。正直最後の点が割に合わないとして訪れる者は少ない。故にここにやって来る男子生徒の顔は寮監からすれば覚えやすいの一言に尽きる。

無論の事、ここに訪れる数少ない男性生徒であるゼルも顔を覚えられている。こちらに顔を出せば、普通ならば呼び出しの理由等を尋ねられるが、ゼルの場合は勝手知ったる何とやら。理由を尋ねないで誰を呼ぶかの質問だけ。

「で、今日は誰を御誘いかな？」

爽やかな笑顔を浮かべる三十路手前の寮監。その事実を口に出せば寮の裏に連れられ焼きを入れられるという噂だ。

そんな顔を一瞥すると、ゼルは普段通りの無表情で話しかける。

「……レイナリリユクシードを」

「シズクシシドウやエミルハーヴェイは呼ばなくてもいいのかい？ 折角の休日だというのに」

「……どうせ最終的には一緒になる。というより、既に二人は寮にいない筈だが？」

「ちゃんと仲間の行動を把握してるとは感心感心。ま、いつも通り数分待つていてくれ、内線で呼びかけてくる」

そう言つて寮監は顔を窓の中へと引つ込める。防犯上の都合なのか、開かれていた窓はしっかりと閉じられ、外と内の境界を阻むガラスには魔術が付加されているのか透けて見えない。

この時間はいつも手持ち無沙汰となるゼルは眼を閉じ壁に凭れ掛かる。

精神統一などではなく、ただ流れ行く時間を無為に過ごし、風が奏でる調べを耳を澄ませ感じとつていた。

「連絡は完了だ。あいつのことだから後数分もすれば息を切らしながらやって来るだろうな」

「……別段急ぐことは無いとあれほど言っていると言つのに」

いつのまにかに開いていた　いや、開く以前に窓の内から歩み寄る気配を捉えてはいたが反応はしなかっただけ　寮監が話しかけてくる。

こちらに来る言葉はいつも通りの返答。普段通りのやり取り。口数少ないゼルが口を酸っぱくしながらも言い含めているのに未だ効果は表れない。

「性分、という奴だろうな。そこまで束縛するのは甲斐性無しと呼ばれても可笑しくないぞ？」

「……俺の周りは世話焼きが多すぎる」

「良いことじゃないか。余り言い過ぎると嫉妬の的になるぞ？　唯でさえお前は他生徒の視線を釘付けにしていると云うのに。解ってるのか？　どれだけの寮住まいの生徒が窓の奥からお前を見てるのかを」

「……これでも暗殺士アサシンの端くれ。人の気配や視線などには敏感だ」

「それもそうか　っと、来たな」

ガヤガヤと騒ぎだす寮内。蠢く群衆の中から一人の小さな少女が飛び抜けて来た。

小柄な体躯はゼルと並べば兄と妹と言われても可笑しくないほどの華奢なものだ。精巧な御人形、そんな風評が良く似合う彼女こそが件の少女、レイナリリユクシードである。

レイナは空の色の髪を頭部の両側に纏めたツインテールを揺らし、学科故の体力の無さだと言うのに息を切らしてまで自身の部屋からいつもこの寮の玄関まで全力疾走でやって来る。はあはあと息を切らしてその場に立ち止まり、呼吸が儘ならず手を膝に付いて肩を揺らす。普段ならパチクリと開かれる愛くるしい翡翠の珠は今では影にも見えず苦しそうに閉じられていた。

そんな様子を毎度見せられるゼルにとっては溜息ものでしかなく、何回苦言を呈しても聞きやしない。半ば諦めの境地に達しているゼルに出来ることは息が整うまで見守る事のみしかない。

「はぁ、ふう……」

だが、いくらそのような境地に達してしようと呆れの視線を送られずにはいられないゼル。反対に寮監は優しげな双眸を向けているが。

「お、お待たせしちやいましたっ！」

「……気になるな。そろそろ行くぞ、寮監も失礼する」

息が整ったレイナに眼を向け、最後に寮監に告げる。

「おー、行って来い行って来い。………そういえば今日は門限までに帰ってくるのか？ 別にこちらとしては泊まりでも一向に問題は無いが。青春は一度きり。若い時はヤンチャしてナンボのものだぞ？」

「……ここに決められてる規約などあってないようなものだろうに。後、後ろの部分は余計な邪が混じってないか？」

「別に問題ないだろう？ 若い男女が日を共にするんだ。小さな間違いが起きる可能性だって十全」

「ま、間違っ！？」

「どうしたリユクシード。顔が真っ赤だぞ？」

「……はぁ。行くぞ、レイナ。いつまでも付き合ってたら目的を果たす前に日が暮れる」

付き合いきれないとばかり、ゼルは振り返ることなくレイナの連れてこの場を離れる。未だレイナの頬は朱色に染まっているがゼルは気にすることなく前を向く。後方から避妊がどうなどと、真昼間

の往来で発するようなものでない卑猥な言葉を掛けられるが全て無視。それを耳に入れたレイナが完熟林檎も真つ青な程の赤さで頬を染めるがそれも無視。

歪ではあるが自身より遙かに強大な力を振るう魔道士メイサーの一員であるレイナも、こういった下世話な話には弱かった。

小動物宛らな身体を尚も縮こまらせながら横を歩くレイナを見る。こんな小さな少女も今日で17歳であり、歳だけを見れば中肉中背であろうとも引き締まった体躯を持つゼルよりも年上。ゼルは早生まれなこともあり、つい此の間16歳になったばかりである。月日だけを見れば半年以上も先にこの世に生を受けたレイナであるが、発育等はそれに見合わない成果しか挙げられずにいた。

仲間内ではスレンダーながらも胸部は平均以上を保つシズクに、その反対を疾走する異常発達した母性の塊を保有し、尚且つグラマ―体系を維持しているエミル。そんな二人に囲まれるレイナは少女体型というよりも幼女性型に近く、前面など俎板と擲擧されても可笑しくない。だからこそ、レイナは自身の身体にコンプレックスを抱いているのだが。隣の芝生は青く見えるとはよく言ったものだ。先に挙げた二人もレイナに少なからずの羨望を抱いていた。その理由が

「……若干顔が赤いが大丈夫か？ 風邪だとしたら大変だからな」

その外見みたく小動物のよう必要以上に構われるという点だ。

シズクはその性格ゆえに、エミルはその醸し出す雰囲気故にゼルに構われることが少ない。頼られることはあっても甘やかされることは滅多にないのだ。頼られることを甘えられるという言葉に変換する彼女達にとってはそれだけでも甘美なモノだが、女は女。嫉妬の一つや二つは内に抱えているものだ。

「だ、大丈夫ですっ」

「……それならいいが」

「あ、そういえばこれからどうするんですか？ ゼルさんからは暇があるかとしか聞かれてなくて、何をすればいいのか全く知らないんですけど……」

「……時期に解るさ」

口数少なく、それでも十全足る信頼を得ているのはゼルの人柄ゆえか。

結局説明らしい説明をされる事は無かったレイナだが、文句の一つも言わずにゼルの後を追う。それは固い信頼関係が結ばれているからか、それとも自身が思慕の情を向ける相手だからか。

足を踏み入れる建造物。

外観は質素な貴族の屋敷というところ。広大な敷地に建てられたそれは正面を初め、人の眼が行き辛い背面もキツチリと装飾が成されており、それだけでこの建物が手抜き工事で建てられた事がないのが窺える。正面玄関付近には色とりどりの季節の花がプランターで育てられ、磨きあげられ指紋一つない窓は太陽の光を綺麗に反射していた。

そして一番眼を引くのが屋根の上に描かれた紋章。刻まれた意匠は校章と同じく、そして北の国『シグムント』が掲げる紋章旗と同じ天を指す剣に逆巻く竜。その大義な紋章を掲げるここが、学校内のクライムに貸与される部屋が集まった居城なのだ。勿論、いくらここが大きかろうと、ほぼ全校生徒がクライムに加入している現状では全ての生徒を一つの屋敷に収容出来る筈もなく、ことごとく同じ設計図で建築された屋敷が後数点学校内に建造されている。

一歩足を踏み入れれば四階まで続く螺旋階段が眼に入り、東西南北それぞれに続く道が真っ直ぐと別れている。南は玄関に続くので説明は省き、東西がそれぞれの部屋へと繋がる道とされ、北は各クライムメンバーが談笑等出来るように設置されている庭園。その庭園を突っ切ると反対側の各クライムの部屋に繋がる道にも出れ、所謂ショートカットの役割もその場所は果たしている。

二階、三階、四階と昇れば完全にホテルの様な内装に早変わり。各部屋にはそれぞれプレートが掲げられ、それによって誰がどの部屋に入室しているのか判別できる。

「部屋に何か用事でもあるんですか？」

「……ああ。大切な、そう大切な用事だ」

「大切な用事、ですか？」

「……俺にとつてもレイナにとつても、あいつらにとつても、な」

二人は扉の前に立つ。

掲げられたプレートには『デイルクロ』と刻まれた文字。それはゼルの故郷で語り継がれてきた物語の一節。夜明けを意味するその言葉は、四人にとつての始まりの言葉だ。

闇夜を囲う四人の心に一筋の木漏れ日が照らし出したあの日。あの日から四人は光を見つけたのだ。

”夜明け（デイルクロ）”という小さな、それでいて雄大な光を。

「……レイナ」

「どうかしたんですか？」

扉の前に立ったゼルは振り返り、レイナに呼びかけた。

「……今日はレイナが主役だ」

「はい？」

「……ここから先はお前が開くべきだ」

そういつてゼルは無理矢理レイナに扉に手を掛けさせる。

突拍子も無いゼルの行動に目を回すレイナだが、ゼルの瞳を見た瞬間にそんな考えはどうでもよくなつた。いつも通りの優しい瞳。何時からだろうか、この瞳の色に目を奪われるようになったのは。

トクンと、鼓動が静かに響く。

ドアノブに手を掛けながらもう一度振り返ってゼルを見た。

迷いは……ない。

意を決し、力を入れ閉じられた扉を開き

「Happy Birthday!」
ハッピー バースデー

「え……?」

扉が開いた瞬間に盛大なクラッカー音。

内からはシズクとエミルの二人が、外から、つまりはレイナの後ろからゼルが打ち鳴らす。そんな音がしても周りの学生が騒がないのはエミルの根回しによるもの。準備万端とはこの事を指すのだから。

ある意味先ほどまで目を回して居たレイナだが、これによりまたも目を回してしまう。

「Happy Birthday。誕生日おめでとう、レイナ」
ハッピー バースデー
「おめでとございます、レイナ」
「おめでとお、レイナちゃん」
「あ……」

三人の言葉により漸く状況を呑みこめたのか、戸惑いの表情から

一転して笑みを浮かべ、その笑みも嬉しさのあまりか表情が崩れる。瞳から零れ落ちる涙は悲しいという感情から来るものでなく、嬉しいという感情から来るもの。

嗚咽を漏らしながらレイナは三人にお礼の言葉を返そうとする。だが、そんな言葉も嗚咽混じりで言葉と成さない。

「あつ、あ…が、ありがとっ………！」

「とりあえず、これで涙は拭いてねえ」

「さ、中に入りましょう？ 周りには既に伝えているとはいえ、いつまでもこのままというのも拙いですね」

肩を支えられながら歩くレイナ。その後ろを優しげな瞳で見つめるゼルは三人が中に入り切った事を確認し、そして扉を静かに閉じた。

覗き見というはしたない行為をしている輩に礼節一杯を以て目礼をしながら。

「えへへ………」

嬉しそうに、それでいてどこか恥ずかしそうにはにかむのは先ほどまで涙を流していたレイナ。今ではその涙も止まっているが、涙を流したせいでその瞳は少しだけ赤く充血している。

その周りでは優しげな笑みを浮かべるシズクとエミルの二人がいて、その三人を見守っているのがゼルという今の立ち位置。まるで三人姉妹とその父親という言葉が浮かぶのは間違いではないのかもしれない。

小さな一室というには些か過小評価である一室は、中央に四人が卓を共に出来るほどの円型のテーブルが置かれ、その上には今日という日の為に前日からエミルが中心となりシズクが補佐した力作であるバースデーケーキが乗せられている。少し眼を離せば奥へと続く扉が二つあり、その先は仮眠用の二段ベッドが、もう片方がユニットバスへと続く扉だ。最後に今四人が座っている手前側に簡易キッチンが設置されている。

「プレゼント……と行きたいところですが、まずは料理が冷める前に頂きましょう。折角丹精込めて作ったのですから、少しでも美味しく頂いて貰いたいですし」

そのシズクの宣言により、四人は乾杯の音頭と共に料理に手を付けていく。

メインを真つ白なホワイトシチューで飾り、色野菜のサラダを彩り、ふつくらとしたパンを横に添えられている。デザートにはエミルの改心出来であるバースデーケーキを食べるので、これだけの量でも腹は満たされるだろう。事実、ホワイトシチューとふつくらとしたパンは相性が良く、予想以上に手が進む。炭水化物の塊であるパンに手を伸ばす回数が多ければ多いほど、それだけ腹は満たされていく。

二人 今回の主役であるレイナと、料理を作った二人が想いを募らせているゼルは心底美味しそうに料理を平らげていく。何気に二人は大食らいなのだ。ここぞという時ばかりか、普段無表情（と言っても少しの機敏の変化も見極められる三人）だが、食事を取っている時だけは穏やかな笑顔が浮かんでいる。そんな表情を見つめるのが何よりも好きなのであった。下手すれば、主役であるはずのレイナよりも。

用意されたシチューも、籠に山のように盛られていたパンも、ボ

ールの中に犇めいていた野菜も今ではその姿を消し、テーブルの上は綺麗に一掃され、残るは一時的に避難させられていたバースデーケーキだけとなった。

四等分……とすると一度では食べ切れないホールサイズのケーキ。簡易キッチンが設備されているということは簡易冷蔵庫も勿論設置されている。なので八等分に切り分け、残った四等分を冷蔵庫で寝かせるというのも一つの点だが、ケーキというのは生物で腐りやすい為に出来るだけ今日中に食べ終えておきたい。

それならばどうしよう。いくらエミルが作る菓子等は美味しく、中でもケーキ類は得意とされており、その味は食べるまでもなく理解出来るだろう。だが、ケーキという菓子は総じてカロリーが非常に高い。ただでさえ昼食時のシチューなどが大変美味しくて大量にそれも鍋が空になるまで皆が御代りしたのだ。それに積み重ねるところか埋もれさせるほどのカロリーを持ったケーキ。一切れは食べるがそれ以上は今日の夜が怖い。それが乙女の心情というモノ。大食らいと称されるレイナでもその行為は躊躇われるのだ。

まあ、そんな懸念も

「……流石はエミルだな。今日のケーキは格別美味しかった」

大食らいでありながら甘党でもあるゼルの胃袋へと消え去っていったが。

「……シズクもパンが柔らかくて美味しかった」

「解りますか？ 私がパンを作ったって」

「……無論、というよりも、パン焼きに限ってはどうしてもかエミルより技能は上だろうに」

「本当に二人ともすっごく美味しかったです！」

「そお？ そう言ってくれると嬉しいよう。ねえ、シズクちゃん？」

「当たり前です。我々とて人、褒められれば嬉しいのは当然の帰結ですね」

結局、テーブル上にあつた全ての食材は跡形もなく消え去つた。残つたのは三人の満面なる笑顔と一人の一見無表情にしか見えな
い微笑。

「それでは」

そう言つてシズクは懐に手を伸ばし、それと同時にレイナに眼を
瞑るように指示。何ら疑うことなく純粹無垢な幼子のように瞳を瞑
つたレイナに対し三人は苦笑を零した。

ワクワクしているのが傍から見ても感じられ、もしもレイナに耳
か尻尾が生えていたのなら、それらは猛然と左右に揺れていたこと
だろう。

そんな様子を見つつも、シズクは静かに懐から一つの存在を取り
出して静かにゼルに手渡す。息を呑むゼルだったがシズクに手で静
かにとジエスチャーされ、愕きにより口から洩れそうになつた声を
無理矢理に呑み込んだ。

渡された後数瞬の時間を経てその意図を感じとり、視線で二人に
尋ねる。

返つて来たのは肯定の合図である首肯。

ゼルは静かにレイナへと近づき首に手を回す。突如の事態に仰天
するレイナだったが感じる体温はゼルのそれ。若干身体は緊張によ
り硬直するもレイナは成すがままにされていた。

人形のように小さな身体。それは風評だけでなく、触つた感触も
それに等しいものだった。小さな身体に大きな力を宿しているとい
う矛盾。壊れ物を扱うようにゼルは慎重に、それでいて優しく繋ぎ

とめた。

今日という日を記念して。

この場に居る四人が確かな絆で結ばれた仲間だという事を証明して。

「あ……………」

開かれた瞳が捉えたものは、自身の首に掛けられている一つのネックレス。

ネックレスにしては簡略なリングトップネックレスだが、その指輪は装飾に凝っていた。琥珀色をした宝石をベースに、縁を白銀に輝く精霊鉱石フェアリーメタル、中心に大きく虹色の輝く精霊魔石フェアリーストーンを添え、それは朝日のように煌いている。所々にアクセントとして惜しげもなく使用されている精霊魔石フェアリーストーンが随所で輝き、まるで一個の生命体のように躍動感を感じられた。

「凄い……………。これって精霊魔石フェアリーストーンじゃないんですか？」

「そうだよお。シズクちゃんが幸運を齎してくれたんだあ、まるで女神だね」

事の詳細を細かに説明するエミル。その間に残り二つのネックレスもゼルに手渡された。

理由はレイナと同じでいいのだろう。小さく頷き、エミルの前に立つ。

「ん……………」

瞳を閉じ、どこか艶のある声を喉元から発するエミル。

並の男ならその容姿と胸に在る二つの双丘によりノックアウトさ

れるだろうが、そこはゼル。全くの変化なしで首に手を掛け、掌で輝くネックレスと繋ぎ止めた。

装飾等は先ほどのレイナとほぼ同様。強いて違う所を上げれば琥珀色の宝石をベースにしていた所が翡翠色の宝石がベースになっているだけ。これは個々の容姿に合うように態々『ルフェグナーデ』の職人が汗水垂らしながら考えてくれたのだろう。

同じようにシズクにも掛けていく。

「お願いしますね……」

こちらは深い海色のした宝石がベースに使われていた。

首に近づいた時、女性特有の甘い香りと熱の籠ったと息が首元に吐きかけられるがそれすらにも反応しないゼル。

「最後はゼルの番なのですが」

若干、というよりも普通に慥然とした表情を晒すシズクとエミル。どうしてこうなったのか理由が解らないゼルにとっては困惑物だが、幾度となく繰り返されてきた反応だ。こういう時の対処法は一つ、触らぬ神に祟りなしとばかりに回避するのが一番。

「今日の主役はレイナちゃんだからねえ。大事な所は締めて貰おうか」

「ということ、よろしくお願いしますね、レイナ」

「えっ!? あ、う……うん、はいっ!」

そう言ってシズクから手渡されたネックレスを受け取るレイナ。やはりというべきか、ネックレスの装飾は先の三つと同様であり、違う場所は同様にそれぞれのあった配色の宝石。レイナが琥珀、エ

ミルが翡翠、シズクが蒼海、そしてゼルが純白。一点の曇りもなく、何物にも染まらない始まりの色がそこにはあった。

拳動不審に成りながらレイナはゼルの首元に手を回す。震える手が両端を繋げる鎖の接合部が擦り合い中々繋がらない。それでもゆっくりと心を静め、漸くカチツという音が部屋に木霊した。

「はわぁ……………」

「流石はゼルです」

「似合ってるよう……………」

感嘆とした三人の息が零れる。

「……………三人には負ける」

気恥かしさを隠すよう、少しだけ早口になりながらゼルは言う。

「ふふつ……………。さて、このネックレスはあのルフエグナーデが意匠を凝らし作って頂いたものです。勿論、一番のメインは刻み込む者コミュニケーターによる刻印魔法。刻印に関しては」

懐から四枚の書類を取り出す。

「まずはエミル。治療師ヒーラーという職業を顧み、まずは物理防護、魔法防護の二つを要に緊急の魔力障壁の発動の三点らしいですね。完全に守護優先の刻印ですが、欠ければ崩れる存在たるエミルには丁度良いでしょう」

はい、と四枚の内の一枚の書類をエミルに手渡す。どうやらあの書類はネックレスに関するものようだ。

「次に私。反射神経等の感覚器官の強化を基に腕限定の強化の刻印ですか。カウンター主体の私にとっての必須技能をピックアップしてくるとは流石としか言いようがないです」

ペラと一枚を後ろ側に持っていき次の書類を読みだす。

「レイナの場合、元々魔力強化が付加された指輪を持っていたのでこれ以外の効果の刻印を指定しましたがいやはや。まずは魔術使用に負担する魔力、精神力の減少。これは精霊魔石フェアリーストーンもあるので相乗効果を生みだしますね。もう一つが周囲に漂う魔力素を装備者の体内に還元し魔力に変える刻印……ですか。前者はともかくとして、後者はそんじょそこらの一級品でも見掛けない様な効果なんです……」

冷や汗を垂らしながらレイナに書類を手渡す。渡されたレイナもシズクと同じように引き攣った笑顔を浮かべていた。

「最後にゼルですが……極めて単純、それ故にゼルにあったコンセプトです。内容は私と同様の感覚器官の強化と身体能力の強化の二点」

「……成程な。流石は世界最高峰というワケだ」

手渡された書類をもう一度上から下まで流し見て、ゼルは刻み込む者にシュニッツェルその評価を下した。

戦闘内容を見たわけでもない相手の特性を完全に見抜き、それでいてその者が望む刻印を刻む、まさに刻み込む者シュニッツェルという名に相応しい存在だ。

「書類に書いてある通り、刻印の効果が切れたのならオーナーであるヴァルド＝セイクリッドが格安で刻み直してくれるそうです」

「至れり尽くせりだねえ」

「アフターサービスも万全、ということでしょう」

首に掛けられたそれぞれのネックレスを互いに見つめ合い、そして笑い合った。

「今日は一日中遊び尽くしましょうか。どうせ明日からまた講義等があるんです、今日くらいは羽目を外しても問題ないでしょう」

「だねえ。それじゃ晩御飯は任せてよう」

「わ、私も手伝いますっ!」

「……程々にな」

デイルクロの部屋には夜遅くまで明かりが灯っていた。

3・誕生日（後書き）

0時に更新出来なくてすいません。思った以上に時間が取れませんでした。次からは出来るだけ0時更新出来るように目指しますので話を小説に戻して、よし、何とかメインキャラが出揃いました。これで漸くプロローグも終わりです。それにしても三万字使ってプロローグって、どんだけ展開遅いんだって話ですね。本当ならもっとパツパツ進む予定でしたのですが、どうしてもかこのような形に……

ま、次からは色々と話が進んで行くのでお許しを。

次の更新も来週とさせて頂きます。そろそろ大学に必要な物資等も買い出しに行かないといけないので下手すれば更新が遅れる可能性も無きにしても非ずですがね（汗）

恒例の単語の説明等の開始。

『デイルクロ』

ゼル達四人が所属するクライムの名前。

デイルクロとは夜明けを意味する言葉であり、由来はゼルの故郷に伝わる物語の一節から。

四人にとっての始まりの言葉であり、大切なもの。

『フェアリーメタル
精霊鉱石』

精霊魔石には劣るが、魔術的要素を含みやすい鉱石の一種。

色も様々にあるがその内で白銀色が一番高価。

感想、誤字脱字等の報告などがありましたら気軽にお願いします。
感想は作者のモチベーションを保つ唯一の燃料です。

4・依頼（クエスト）（前書き）

この物語に関する国名、人名等は現実世界のモノとは関係ありません。云わばフィクションです。

それらに関する苦情等は一切受け付けませんのであしからず。

特に問題ないようでしたらスクロールしてください。

上記の文を認められない方はプラウザバックを推奨します。

4・依頼（クエスト）

燦々たる日の光が大地を照らし上げる頃、『デイルクロ』のメンバーは日の光が入り込まない洞窟の中を彷徨っていた。

先頭にゼルを据え、その左右後方にエミルとシズクが、そして三角の陣形の中央にレイナを囲い全方向から奇襲を受けても対処できるような布陣。事実、感覚器官が人から逸脱したと言われようと誰も疑わないゼルを頂点に、自身の間合いの内ならばゼルにも劣らない反応速度を見せるシズク、治癒師ヒーラーの筈なのにどうしてか素手格闘スウェットどころか軍隊格闘技や地方武術、果てには古流武術諸々を扱うエミルなど。どう足掻いても中級どころか上級に分類される魔物ですら奇襲を成功させるには不可能に近いだろう。

「……目標までの距離は？」

周囲の警戒を怠らないようにしながらも、ゼルは振り返らずに尋ねる。

それに返答するのはシズクの仕事の内でもあった。デイルクロ内でのシズクの立ち位置は所謂マネージャーに近い。クライムに関する交渉事を主に、依頼内容クエストの確認、報酬の分配または保管、学校に提出する書類の用意、その提出する書類の不可のチェック等。戦闘になれば魔道士ソーサラーであるレイナの護衛。

間違いなくデイルクロ内で一番働いていると言えるだろう。

「予測で、このまま道を迷わず進む事が出来れば一時間以内に。間に休憩を挟めば二時間、急なアクシデントを考えても三時間あれば辿り着けるでしょうね」

「ん、時間も時間だしどこかでお昼を取りつつ休憩、その後に討伐って感じかなあ？」

「……それがいいか。休憩序ついでに今回の依頼内容クエストの復習、並びに討伐手順の確認等もしておくべきだな」

ゼルの言葉に全員が頷き、搜索は再開される。

布陣はそのままでも変更はなく、十数分もすれば丁度良い休憩場所を発見する事が出来た。

三人が昼食を用意する間、ゼルは周りに危険が潜んでいないかの確認を怠らない。入り組んでいる洞窟の中なので正確性は欠けるが、それでも数キロの範囲なら気配を感知できる。

そんなゼルとは反して、三人娘は昼食の準備に取り掛かっていた。いつものまにか周囲にはレジャーシートが敷かれ、その上には昼食が入っているであろう重箱を筆頭に、飲み物を入れたポット、昼食を食べる為のスプーンやフォーク、終いにはジパング特有の食器である箸まで。

これほどの大荷物は本来ならば持ち運ぶことなど不可能に近い。確かに大きなリュックサックや登山用の鞆などを活用すればどうにでもなるうだろう。しかし冒険者という職業柄、そんな大荷物を背負っては仕事も儘ならない。不意の奇襲時に、荷物を背負っていて対応出来ませんでしたでは話にならないからだ。

それを解消すべく作りだされたのが魔道具、通称『袋』。形状は至って普通の袋で、大きさは種類にもよるが小さいものからS、M、L、LL、LLLと分けられ、実際ののくらいかと言われると、Sがポケットサイズ、そこからMが鞆サイズ、Lがテーブルサイズと続き、LL、LLLはその上を行く。ここまでなら単なる袋と同義なのだが、これは違う。

元々は>テレポート/瞬間移動<の魔法を再現する為の過程で生まれた空間系統の魔法で、これは袋の内を一種の閉鎖空間と捉え、その空間に歪みとも呼べる穴を開ける。閉鎖空間内に於いては質量や時間と言った外的要因は作用されず、ただ一個空間としてのみ世

界からは認識され、内に入れたものは全て入れた状態から劣化しないまま保存される。これは閉鎖空間内では時間という要因が働かない為で、劣化という概念が働かないのが原因だ。これにより、保存できる質量は無視でき、保存の難しかった食料等が安全に、それについて簡単に保存できるようになった事からこの『袋』は冒険者達にとってには必需品とまで言われるほど人気を集めた。

術式自体はそれほど高度なものではなく、空間系統の魔法が得意の者ならマーセナリーに通う年齢の者でも作りだせる。それ故、利便性に富んだ『袋』もそれほど高価な物ではなくなり、今ではどんな人間も持てるような値段に落ち着いている。

漸く周囲の確認を終えたのか、ゼルも敷かれたレジャーシートの上に座り込んだ。

「……周囲一キロは問題ない。見晴らしがいい此処なら奇襲を受ける心配もないだろう」

四人が陣取る場所は背後に壁を置き、前方は開けた一角となっている。

ゼルの言う通り、四人に何らかのアクションを仕掛ける為には彼らの視線が通る道を通り進むしかなく、どう足掻いても奇襲を仕掛けるには不向きと言える場所だ。無理矢理仕掛けようと思えばいくらか方法は思い付くが、仕掛けてくるであろう魔物がそこまで知性を発揮する場合も少ない。

決めつけるのも問題だが、無駄に気を張り詰めるのも問題だろう。肩から力を抜いて適度にリラックス。休める時に休む、これが冒険者の必須技能の項目の一つだ。

「……しかし妙だな」

手渡されたコップを持ち、重箱を少し突きながらゼルは呟いた。他の三人もゼルと同じように重箱を突きながらその呟きを拾い上げる。

「妙、とは？」

「……今回の目標は？」

「デイベインサイスじゃなかつけえ？」

今回ゼル達一向が受諾した依頼内容クエストは至って単純であり、シグムントの中央都市から幾分か離れた場所に位置するバラウナの洞穴に棲息するデイベインサイスの討伐である。

デイベインサイスとは蠍型の大型魔獣の一種で、全長三から四メートルほどの巨体を誇り、尾に鋭く尖った毒針を有しているが、それ以上に厄介なのが両の腕と同化している二本の鎌だ。鎌は外見上の鋭さは元より、何より問題なのが刃の部分に付加されている属性が聖属性であるという点。

元来、魔物という異形の者共のほぼ多数が聖属性とは反対である魔属性と四大元素精霊や派生精霊の属性を有している場合が多く、大抵の冒険者の防具はそれら魔属性のダメージを軽減する作りとなっている。反してデイベインサイスが持つ属性は聖属性であり、冒険者が普段使う防具ではダメージを防ぎきれない事が多い。それ故、冒険者の中ではデイベインサイス等の聖属性を持つ魔物は忌避されることが多く、件のデイベインサイスもランク付けではA+ランクと高ランクとなっている。

「……そうだ。ただ不可解な点が一つ。どうして今の時期にデイベインサイスがこんな洞窟に籠る？ こいつらは基本的に深い森の中を塙とする筈なのに」

「あれ？ でもデイベインサイスって産卵期には洞窟に籠るじゃ…」

「…？」

「……ああ、確かに産卵期には外敵の攻撃から身を守る為に洞窟へ籠る性質があるにはある。が、デイバインサイスの産卵期は冬真っ只中のヴェスタの月だ。今は夏季に近いヴィーナスの月。半年も遅れてどうして洞窟に籠る必要があるんだ？」

疑問を顕わに、ゼルは眉を顰めながら虚空を見つめる。

その疑問に答えられる存在はこの場にはなく、ただ他の人も黙つたまま見えぬ空を仰いでいた。

そんな中、ゼルは何かを感じとる。目前の脅威や危険ではない。それこそ第六感や虫の知らせという、来るべくして訪れる、そんな一抹の不安を。

煌く刃の柄を握り締め、ゼルは疾走する。

バラウナの洞窟は、その名前通り洞窟の造りとなっているが以外と内層は大きく広がっている。上下左右は壁で囲まれているもの、入り回るだけのスペースは確保されていた。

四人の眼前に緩く散開している緑の豚。ゴブリンという名で知られている魔獣の一種だ。

ゴブリン単体でのランクはFランク。しかしそのランク通りと侮っている痛い目を見る。ゴブリンは大抵の場合は仲間と徒党を組む場合が多く、単体で見つける場合などないに等しい。その時点でランク付けなの無用の長物でしかなく、また彼奴が徒党を組んだ場合のランク付けはD+ランク。それでも冒険者達にとってはまだまだ何とかなるレベルだ。しかし、最も注意すべき点は他に在り、彼らの中に司令塔とも言つべきゴブリンがいるかないかを真っ先に

看破しなくてはならない。

司令塔となるゴブリンは他のゴブリンとは違って武器が異なっていたり後ろに下がり指揮をする、頭の上に何かを乗っけているなど、他のゴブリンとは違った点がどこかに存在する。そのゴブリンがいるかいないによってゴブリンの集団も烏合の衆であるか厄介な敵なのか変わってくるのだ。

「ええいつ!」

エミルの拳が十頭いる内の真正面に陣取っていたゴブリンの顔面を捉え、そのまま”粉砕”する。体表と同じ緑色の血飛沫を盛大に上げるが、その血を浴びることなくエミルはすぐさま後方に避難。避難した所を残ったゴブリン二頭が追撃を仕掛けるが、そう易々とやられる筈もない。

エミルが後方に下がる擦れ違い様にゼルが前進。突如現れたゼルにも諸共せず突き進むゴブリン達は勇敢、ではなく無謀。煌く殺刃を振り上げてゼルが片方のゴブリンの腕を寸断する。絶叫を上げる仲間に驚き、もう片方のゴブリンの動きが一瞬だけ停止。その刹那の隙を見逃すはずもなく、振り上げた勢いを殺さずに跳躍、それと同時に踵による強打を顎に浴びせ、大の大人以上の体重を誇るゴブリンを宙へと浮かせた。

「 エミルッ! 」

「 まっかせてえッ! 」

後方に一時的に退避していたエミルが再度前線へ復帰。そのまま宙へ浮かぶゴブリンの鳩尾を抜き手を穿つ。最早一本の刃と化す手刀はそのまま抵抗一つなくゴブリンのどてっ腹に風穴を開けて絶命へと追いやった。

残る八体の内の半分はゼルとエミルの両者を軽く迂回する形で二人の背後に侵入する。本来なら逃す筈のない二人だが、相手が相手。何体かわざと抜かさないと残る二人の鍛錬にもならない。

後ろに”抜けさせられた”ゴブリン四体は二人一組へと別れ、左右から後衛に位置するシズクとレイナを強襲する。

四体とも手には大きな櫂の幹のような棍棒が握られており近接戦闘の心得のないレイナにとっては脅威そのものだろう。しかし、レイナの眼には恐怖の色は無く、ただ一心不乱に魔典に魔力を籠める。魔典とは本来魔法が使えない前衛職業が魔法を使う為の補助媒体であり、本型の魔道具の一種だ。各ページに刻み込まれている術式に魔力を流す事によって擬似的に魔法を発動する事が出来る。しかし、魔典に刻みこめる魔法は下位の魔法までで、あくまで前衛職業の人間が補助的に扱うモノであり、魔道士が扱うモノではない。しかし、レイナは先天的に詠唱破棄並びに広範囲殲滅魔法しか唱える事が出来ないのとして補助媒体を扱い魔力を温存しているのだ。それにこちらを使う事により三人のフォローなどもこなす事が出来る。

反して、その場に立ち止まり魔力を籠めている間にレイナを守護するのが護衛役のシズクの役目であり、シズクは腰に佩く刀に手を添え、ただ瞑目していた。

刀の刃が届く半径1.5メートルがシズクの必殺の間合い。その内側ならばどのような敵であろうと斬り伏せる。

「ッ！」

神速の抜刀術。

それこそがシズクが生まれて此れまで極めてきたただ一つの技であり、何人たりとも触れること敵わない業へと昇華されたのだ。

ゼルですらその剣閃は紙一重でしか避けることが出来ず、ゼルよ

りも遙かに鈍重なゴブリンは言わずもがな。左右から襲おうとしたゴブリンに対し、シズクは一步だけ後ろに歩を刻み、そのまま目にも止まらぬ早業でゴブリン四体を一瞬で両断する。

納刀した剣閃すら見る事が叶わず、シズクが鞘の内に刀を収めた時に鯉口こいしと？が接触し音が鳴った事により自身が斬られた事を漸く知覚出来たのか、一足遅れて断末魔を上げ、そのまま崩れ落ちた。

ポトツ、という音と共に崩れ去ったゴブリンの死骸。そんな音が洞窟内に響いたと同時に、ゼルも己の手で腕を切り飛ばしたゴブリンの頸を刈り息の音を止めた。

「フ、フゴツ!? フ、フフゴフゴーツ!」

残りのゴブリンも漸く自分達が狩人ではなく獲物であるということとを悟ったのか、司令塔のゴブリンが残ったゴブリンに退却命令を下す。が

「>シルフェンウイング/風精風刃<」

レイナが唱える魔法が逃がさない。

既にレイナの視界を遮る場所に三人はおらず、先には恐怖を顔に張り付けたゴブリンが三体。即座に身体を反転させ逃亡しようとするが遅い。不可視の刃がその背中を無慈悲に襲う。

断末魔は洞窟内に木霊するがそれも一時の間のみで、痙攣を起こした数秒後には物言わぬ肉塊と成り果てた。

「……行くぞ」

ものの数分で屍と成り果てたゴブリンの集団。

陰鬱な洞窟内にゴブリンの死臭が立ち込める。明りは光苔が天井

や床などに大量に生むしているので本当の暗闇とは言えないが、それでも普段の生活空間と比べるとその差は歴然だろう。

薄暗い洞窟とそれを後押しするかのような死臭。気力体力等を削ぐことには事欠かない構成である。

そんな最悪のコンディションの中、ディルクロー行は一つの弱音も吐くことないまま洞窟内を突き進む。

「それにしても魔物が幾分か多い気がしますね……」

駆け足で洞窟内を探索するのは些か危険なので四人は若干の早歩きで歩を進めていく。隠れた理由として後衛の学科であるレイナの体力を酷使しないというのも一つだろう。

フォーメーションは休憩前と同じ。時折先頭に立つゼルが後方を振り返る以外は全員が前を向いている。

「だねえ。ここまで来るのにジャイアントラビットが三匹、キラービが六匹、ウツゴコックが二頭、グリズリーが一頭、それからさっきのゴブリンが十体。一回の討伐クエスト依頼の総計で見れば可笑しくないかもしれないけど……」

「……短時間での遭遇率が異常過ぎる、か」

「うん。休憩前は全然いなかったのに奥に進めば進むほど遭遇率が上がってるのもそうだし、いくら何でもこれは異常すぎる気がするねえ」

進行方向は勿論の事、後方すらの注意も怠らずにゼルは自分の考えを三人に話す。

「……尤もらしい理屈を述べるなら奥に籠るディバインサイズが原因であり、食料等が確保できなくなり出口付近まで採集範囲を広げ

ざるを得なくなつたというところ。若しくは」

「　　デイバインサイズが産卵期でもないのに洞窟に籠るようになった原因に関係がある、またはその原因が根本なのか、ですね？」

「……ああ」

曲がり角からまたも新たな魔物が飛び出してくる。

大きな蜥蜴の外見からしてジャックリザードだろうか、片腕には両刃斧が握りしめられ、もう片方には木製ではあるが樹木にすれば強固な部類に入るであろうバックラーが抱えられていた。

ジャックリザードが四人を視覚に捉えるよりも前に、ゼルが即座に眼前に躍り出る。

突如現れた外敵に目を剥くジャックリザードにゼルは情け容赦なく斬撃を浴びせる。堅い鱗に守られているジャックリザードにこれと言ったダメージを与えられないということは百も承知。ディルク口内でのゼルの対魔物戦での立ち位置は、突撃による各個撃破ではなく脆い部位（目や間接等）の破壊や敵の正面に立ち注意を引く囷の役目だ。

躍り出たゼルはその俊敏さを生かし敵を攪乱する。

人間程の知性を持たないジャックリザードはゼルの後ろの存在に気を掛けることなく、自身の眼の前を煩わしく動き回るゼルに照準を合わせた。

振りかぶる両刃斧、当たれば打たれ弱いゼルにとっては致命傷のそれだが大振りの攻撃を受ける筈もない。掠ることなく頭上から振り降ろされた斧を回避し、斧はそのまま地面に深々と突き刺さった。

絶対的な隙。これを見逃すはずもなく、ゼルは斧を握り締めている方に踵を落として斧を振り落とす。蹴りを放つたと同時にその場から退避すると、後方から炎の矢が飛翔する。レイナが放つた下位の炎属性の魔法だ。その魔法はもう一方に携えていた盾に命中。盾

は中々に頑丈で物理的に破壊するにはいくらかの苦勞が掛かった事だろうが、ジャックリザードが持つ盾は木製。当たると同時に燃え盛り、熱による痛みでジャックリザードは雄叫びを上げた。

武器は無く、身を守る防具も失った。体勢は熱による激痛により膝を付くという死に体。

そこに必殺が穿たれる。

治療師ヒーラーという名の武闘士モンク、錬度で言えば武神と言つて過言でない威力を叩きだすエミルこそがディルクロに於ける切り込み隊長の役割を果たしている。ただでさえ彼女が誇る筋力などが馬鹿げているというのに、そこに上乘せするかのように身体強化魔法による火力の水増し。最早災害と言われても文句は言えない威力を出すエミルは、ウォルシングの生徒達からは陰で破壊神シツァと呼ばれている。

それを証拠に、魔力の膜が覆われたエミルの拳はいとも簡単に頑強なジャックリザードの頭部を粉碎する。水風船が割れたかのように噴き出る血潮も一滴たりとも浴びず、エミルは瞬時に飛び出た隊列を戻す為に元の位置へと帰った。

息つく暇もなく、ディルクロは洞窟奥深くへと歩を進めていく。

洞窟内に侵入して早八時間は経過。

昨晩の内に洞窟近くの街で休息を取り、明朝に出発。朝と昼との境辺りに洞窟に内に足を進め、太陽が真上より少し傾いた頃で昼食による休憩をはさみ、今に至る。ここからでは見えないが既に日は暮れ燃えるような夕日が水平線に沈んでいる頃だろう。合間合間に休息を取つてはいるが、やはり後衛の学科であるレイナの表情には影が見え始める。

「……そろそろ最深部、後一踏ん張りだ。レイナ、やれるか？」

警戒を怠らず、少しだけ肩で息をするレイナにゼルは問いかける。返って来る言葉はやはりというべきか、大丈夫との旨。治癒魔法に体力自体を回復させる魔法があればいいのだが、現在でもそのような魔法は生みだされてはいない。元々、体力とは生命力と密接にかかわる事が多く、体力を回復させるという事は生命力を回復させることと同義で、生命力を回復させることが容易でない。従って生命力と密接に関わりを持つ体力を回復させることはそう単純な事柄でないということは理解出来るだろう。

旧暦時代にはそういう類いの禁呪に指定されるような魔法もあったようだが、今では過去の産物と成り果て行方知らずのまま。結果現在の認識として体力を回復させるには休息を得る他ないというのが実情だ。

「まだまだ大丈夫ですっ……！」

「……強がりと言えるだけ大丈夫か」

「ええ。ですが本当に辛くなったのならすぐに言ってくださいね。」

「ここにいる全員は誰も貴方の事を責めないんですから」

「どちらかって言うと辛いのを隠してる方が私達の場合は怒るよね？」

「ふふっ、そうですね」

少しの会話でも気疲れというモノは解消するものだ。

陰々滅々とした薄暗い洞窟の中を黙々と会話なく探索していればそれだけで体力というのは気付かない内に削られていく。反して、少しでも良いのでそこに会話を混ぜると驚くほど効果が出る。病は気からという言葉があるように、精神的な疲れは体に伝染し肉体的疲れに繋がってしまう。

それ故に会話というのは軽視されがちだが重要なファンクションの一つなのだ。

会話の御蔭により朗らかな空気が流れていたが一変、ゼルが立ち止まる。それと同時にゼルの纏う雰囲気に変化が起きた。ピリピリと肌を指すような感覚がゼルを中心に辺り一面を覆い始める。それはゼルが臨戦態勢に移行したという証でもあった。

「……来る」

その呟きが耳に届いた瞬間、全員が一斉に臨戦態勢を整え始める。ゼルが隊列の先頭に悠然と構え、エミルは自分の手を握り締め確認する。シズクはただ只管心を落ち着かせ明鏡止水の極意を体現し、レイナは魔典スヘルブックを開き、抑えていた自己の魔力を解き放つ。

臨戦態勢から戦闘態勢へ。それは交戦の狼煙

「……デカイ、な」

遠目からでもハッキリと見えるその巨体。純白の甲羅に身を包み、禍々しい漆黒の針を有する魔獣種の一匹。両の腕に同化する透明感ある白の大鎌は、幻想的な雰囲気呼び起こすが故に死神の鎌に見えるのかもしれない。六本の脚部で巨体に見合わない俊敏な速さで地上を駆け巡り、その両鎌と毒針を以て敵を捕食するA+ランクの大物。

元々が蜘蛛類の仲間であり、洞窟の天井を移動するのもお手の物。室内で戦闘する場合はその脅威度は跳ね上がりAAランクにまで達するほど。

そんな相手こそが今回の目標。ターゲット

「……布陣、戦略は普段通りだ。解ってるな？」

最後の通達とばかり、ゼルは少し遠くからこちらに迫り来るディ

バインサイスを睨みつけながら問いかける。

「解ってますよ。いつも通りにゼルが奇襲、攪乱を行い」

「エミルさんがゼルさんの作りだした隙を突いて強襲並びに部位破壊」

「シズクちゃんあまり動けないレイナちゃんの護衛でえ」

解ってるばかり、三人は笑みを浮かべながら揃えて答え、最後にゼルがそれに応じた。

「レイナが止めの殲滅だ」

声は無く、ただ全員が頷き返す。

ならばと、何一つ声を発することなく四人はこちらに迫り来る蠍を睥睨した。

戦場いくさばに合図などなく、既に鐘は打ち鳴らされた。

土埃を上げながら疾走するデイバインサイスは、今や十数メートルという距離しか離れていない。既にデイバインサイスの瞳に四人は獲物と認識されたのだろう。脇目も振らずただこちらから視線を逸らさない。

十メートル。

ゼルが地面を強く踏み締めた。

エミルが息を小さく吐き零す。

八メートル。

瞑目していたシズクが瞳を開く。

七メートル。

スベルブック
魔典を開き、レイナは魔力を籠める。

六メートル。

一番槍とばかりゼルが駆け抜ける。

五メートル。

オープンコンバット
開戦開始。

零。接敵、

軽装備であり防御力が紙と言われる暗殺士^{アサシン}にとって魔物との戦闘は困難を極める。

攻撃を貰えばまず一撃で身体に大きな風穴が開くか左右バラバラに引き裂かれ、かといって攻勢に出たところで攻撃力に乏しい暗殺士^{アサ}は有効打を入れ辛い。攻撃を仕掛けるにはハイリスクを背負い、それに見合う報酬はローリターンという危険と釣り合わないのが暗殺士^{アサシン}の魔物との戦闘内容だ。

故に暗殺士^{アサシン}が単独で魔物の討伐依頼^{クエスト}を受諾する事など少なく、それはゼルでさえ例外でなかった。

今日戦ったどの魔物よりも堅固な鱗に身を包むディバインサイズに苛立ちを覚えるゼル。攻撃を加えようにも握るナイフでは刃が通らず、柔らかいであろう関節部分さえ一撃では致命傷へとは至らない。かといって隙を作ろうにも、その巨体と巨体に合わない俊敏さで上手く作りだすことが出来ず、拳げ句の果てには天井にぶら下がり、そこから強襲を仕掛けてくるという三次元での攻撃。

此処まで来る道は幾分か広がったのだが、ここは横に広く縦に狭い。狭いといっても天井までは四、五メートルほどあり、ディバインサイズご自慢の両鎌を思う存分振るえるほどのスペースは確保されていた。

舌打ちを零し一度後ろに退く。それと同時に飛び出す影が一つ。疑いようもなく、エミルだ。

「ハアッ！」

普段からは想像できないような裂帛な気合を込め、迫り来る鎌の側面を叩いて逸らす。横からの衝撃に弱かったのか、ディバインサイスの体勢は崩れ、その隙に両鎌の内側に滑り込む。如何に大鎌が脅威であるかと、振るっても当たらない内側に入り込んでしまえばどうということはない。それを実践するかのよう^ににエミルは零距离に侵入し、そのまま胸郭に拳を叩き込んだ。

結果はディバインサイスの胸が少し凹んだだけに終わる。

「あれでも怯み一つしないって厄介だねえ……」

掴まれるのを阻止すべく、エミルはすぐにディバインサイスの内側から抜け出す。

「……思った以上に堅いな」

苛立ちを含んだ軽口を叩きながら、再度ゼルは突貫する。が、身の危険を感じ上半身を可能な限り反らした。すると、その予感が的中したのか、ディバインサイスは大きく口を開き、あるうことがそのから魔力弾を吐き出した。

飛来する魔力弾はゼルに当たることなく後方に飛んで行く。その先に佇むのは魔典スベルブックの補助と並行し、隙を見て広範囲殲滅魔法を唱えようとしていたレイナとそれを護衛するシズクの二人。

飛来する魔力弾は並の冒険者でさえ直撃すれば致命傷を負うほど激しく、防御力がゼルよりも劣る二人が命中すれば、それこそ即死級の破壊力を伴っている。

しかし、二人は動かない。片方は瞳を開け、その瞳には恐怖の色は無く、ただ眼の前で自分を守ってくれる事を絶対的信頼感を宿し、もう片方は先の時と同じように瞑目していた。

後数メートルで激突するという最中、シズクの身体が仄かに発光する。

「 霊閃ッ！」

光宿す剣閃が魔力弾を真つ二つに切り裂いて消滅させた。

本来ならば触れた瞬間に爆発するであろうそれを、シズクは持ち前の抜刀術の剣速と、ジパング特有の武技『氣』を用いて両断したのだ。

『氣』は生命体誰しもが持つ力、つまり生命力を使う技である。

生命力を使うと言っても、本当に自身の寿命を削るという意味ではなく、体力と精神力を糧として纏うものだ。使い方は幅広く、先ほどのシズクが扱ったように物体に纏わせ、本来ならば切断できないような魔力などを切断したり、強固な強度を持つ物体を切断したり、他にも身体に纏い筋力や感覚器官の強化、『氣』による物体形成など考えれば考えるだけ幅は広がっていく。

また、『氣』は魔法で身体能力を強化した時よりも遥かに高い効果を得ることが出来る。これは身体能力などが生命力に関係しているからだと思われる。

「>アイスジャベリン／氷槍くッ！」

スベルブック

お返しと言わんばかり、レイナが魔典を用いて魔法を発動させる。

十数本の氷で作りだされたジャベリンがダイバインサイス目掛けで投擲される。本来ならレイナによる広範囲殲滅魔法で灰燼と化することも出来るのだが、生憎とここは洞窟内。ただでさえ狭いというのに、そのような場所でそのような魔法を解き放てばゼル達を巻き込みかねない。いや、巻き込むだけならまだ許容範囲かもしれない。最も怖いのがそれによって起こる天井の崩落だ。こんな洞窟奥深くで起こしてしまえば良くて脱出不可能による衰弱死、最悪で生き埋

めになつてしまう。

だからこそ、ディルクロの最終兵器である彼女を多用する事が出来ないのだ。

「……それでもレイナの魔法はダメージを与えられるな」

殆どが脇に逸れたり弾かれたりなので着弾しなかったが、それでも二、三本は着弾し、確かにダメージを与えていた。

「……攻撃の起点はレイナの魔法。それで作りだされた柔らかい肉を俺とエミルが追撃を掛ける。シズクは同じようにレイナの護衛。いいなっ!?!」

「了解しました」

「はあい」

「解りましたっ!」

4・依頼（クエスト）（後書き）

やはりというべきか、前話は余り好評ではなかったですね。まあ自分でもこれはどうかと悩んだ物ですので当たり前と言えは当たり前ですけども。

もう一週間ほど様子見をしますが、それでも評価が変わらなかった場合は前話は消去、後にプロットの変更等をし、最終的にはクール系主人公が主体となって物語を進めていきます。

プロットの方もあまり面倒ではないですし、反対に勘違い成分を抜いた事によりこちらとしては楽になるという結末になりましたがね（笑）

まあ勘違い物はまた今度ということ。大学に行ったら文学部か物書きのサークルに入る予定なので、勘違い物等はそちらで書く予定かな？

書いたのは余裕があったらこちらにも載せますが、まあ無理でしょうね。

他の予定としてはループ物とVRMMO物も一つ書く予定。

勘違い+ループってのも中々に楽しそうですけど。

通例の単語紹介等へご案内。

『属性』

基本的に属性という単語が意味するのは四大元素精霊『火』『水』『風』『地』の四属性、それから派生した『氷』『雷』『木』、根源精霊の『光』『闇』、そして神ではなく人が生み出した『無』の十属性を言う。

しかし、他にも『聖』『魔』の二つの属性があり、これはその存在が持つ魂の性質で、これら二つの属性は互いに相反し、互いに調和する性質を持つ。

一般的に『聖』の属性を正義、『魔』の属性を悪とされていた時代もあつたが、現在ではただの存在が持つ属性にすぎなくなつた。

人間には『聖』が多く、魔物には『魔』が多かつたのが原因だろうが、今では少なからず人間にも『魔』はいるし、魔物にも『聖』は存在する。

『ランク』

作中では他にもランク付けがあるのだが、今回の場合は世界が規定している魔物のランク。危険度と捉える場合の方が解りやすいかもしれない。他にも珍しい場合や入手できる鱗や爪等が高価な場合もランクは吊り上げられるので、一概に危険度とは言ひ辛い場面も。

ランクは最低をGランクを置き、順にFからBまで続き、AからはAA、AAA、S、SS、SSSと並べられる。もつと詳しく説明される場合は-や+といったものが付く場合も。

冒険者（戦闘関連）が受ける基本的な依頼はEからSの間。SS以上はそれこそ国家間、または世界間で処理されるのが殆どで、個人で依頼されることは滅多にない。

地方で有名な冒険者が受ける依頼が大体AからAA+の間。ウォルスングに通う生徒が受ける平均的な難易度はCからA-。過去最高でS+。

『スベルブック 魔典』

本来魔法が使えない前衛職業が魔法を使う為の補助媒体であり、本型の魔道具の一種。

各ページに刻み込まれている術式に魔力を流す事によって擬似的に魔法を発動する事が出来る。しかし、^{スベルブック}魔典に刻みこめる魔法は下位の魔法までで、あくまで前衛職業の人間が補助的に扱うモノであり、

ソイサラ
魔道士が扱うモノではない。

スベルブック
態々魔典を通して魔法を発動するより自身で発動した方が威力や消費魔力等が優れているというのが理由だ。よつぼのことがない限り魔道士が魔典を持ち歩くことはない。時たまに自身が扱えない属性の魔法を使う為に魔道士でも持ち歩く存在もいるがそれはごく少数である。それでも下位魔法しか扱えないので態々それらを使うより、自身が得意の属性魔法を扱う方がコストパフォーマンスに優れる場合が多い。

スベルブック
また、魔典のページに術式を刻み込むのは簡単で、魔典も色々なバリエーションが各地で販売されている。

ただどうしてか中位以上の魔法は刻みこめない。これは精霊が関係していると研究者は予測している。

『氣』

ジパング特有の武技。

氣は生命体誰しもが持つ力、つまり生命力を使う技であるが、本当に自身の寿命を削るという意味ではなく、体力と精神力を糧として扱うものだ。

使い方は幅広く、シズクが扱ったように物体に纏わせ、本来ならば切断できないような魔力などを切断したり、氣未使用時なら切断出来ない強固な強度のを持つ物体を切断したり、他にも身体に纏い筋力や感覚器官の強化、氣による物体形成など考えれば考えるだけ幅は広がっていく。

氣は魔法で身体能力を強化した時よりも遥かに高い効果を得ることが出来る。これは身体能力などが生命力に関係しているからだと思われる。普通に考えてみれば氣≡生命力≡力の源のような等式が成り立つ事からすぐに思いつく事柄だろう。反対に魔力は魔力≡精神力≡外界に干渉する力のような等式が成り立つかもしれない。

通例の魔法紹介へご案内。

>シルフェンウィング／風精風刃<

下の下に位置する風属性の魔法。

不可視の刃を飛ばし相手を切断する。威力は使い手によりまちまちで、木を切断するのが限界の魔道士もいれば、二階建の家を楽々切断できる魔道士も。

>アイスジャベリン／氷槍<

その名の通り氷の槍を作りだす下位の魔法。

大きさや強度は使い手によって変化する。下位の中では上から数えた方が早いほど攻撃力が高く、魔道士ソサラー成り立ての頃はよくお世話になる魔法。コストパフォーマンスに優れている。

PS . そう言えば今日は誕生日でした。漸く18歳。これで学生証やら免許を提示してオールでカラオケに籠れるように(笑)

PSのPS . 最近は0時更新が出来てない。ちよつと怠け過ぎかな？ でも明後日テストなのにこんなんで大丈夫なんだろうか？ クラス分けテストだから力む必要もないけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2615r/>

探索型学園物語

2011年7月27日22時35分発行